

夫婦塚古墳 2

— 金武古墳群7次調査報告 —

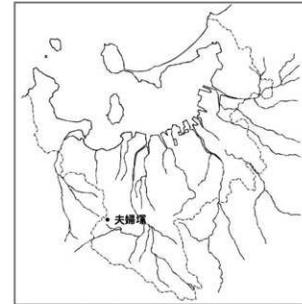
2006

福岡市教育委員会

MEOTO ZUKA

夫婦塚古墳 2

— 金武古墳群7次調査報告 —



調査番号 0423
調査地号 K06-H7

2006

福岡市教育委員会



(1) 調査地点全景（東上空から）7次



(2) 1号墳石室（南から）3次



(3) 1号墳出土五鈴鏡

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。福岡市教育委員会では、かけがえのない文化遺産を保護するという立場から、市内の遺跡把握に努め、その保存、記録を行っています。

本書は、平成16年度に行った、夫婦塚1号、2号墳の調査の内容について報告するものです。2基の古墳は従来より巨石墳として知られ、墳丘の保存が良い2号墳は市指定史跡に登録されていました。今回の調査では、古墳の周りを巡る周溝等の施設を確認し、両古墳が全国的にも大型の方墳であることが明らかになりました。

本書が埋蔵文化財、地域の歴史に対するご理解の一助となり、また考古学上、地域史の資料としてご活用頂ければ幸いです。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

例 言

- ・本書は福岡市西区大字金武頭/尾1665番地他における金武古墳群H群1号墳、2号墳(通称夫婦塚)の内容確認調査報告書である。金武古墳群7次調査にあたり、乙石H群では3次調査に次ぐ2回目の調査である。
- ・本書で使用した遺構、遺物実測図、写真は3次調査分は既報告のものを使用し、7次調査分は担当者その他、遠藤茜、山田ヤス子が作成した。製図は山崎賀代子が行った。このほか資料整理において上田保子、前田みゆきの協力を得た。
- ・本書に使用した方位は磁北で、座標北から6° 21'西偏する。
- ・本書に関わる資料は3次調査分は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されており、7次調査のものは今後収蔵予定である。
- ・3次調査出土金属器について福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎が新たな知見を加え巻末の表に示した。
- ・本書の編集、執筆は池田が行った。報告にあたっては、3次調査担当の塩屋勝利、また蔵富士寛をはじめとする文化財部諸氏に御教示を得た。

遺跡調査番号	0423		調査略号	KOK-H-7	
所在地	福岡市西区大字金武頭/尾1665他		分布地図記号	94	
開発面積	-	調査対象面積	4031.9m ²	調査面積	4031.9m ²
調査期間	2005.4.5～2005.10.28				

本文目次

I はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査体制.....	1
II 遺跡の立地と調査の概要.....	1
1. 立地.....	1
2. 金武古墳群.....	1
3. 夫婦塚古墳.....	3
4. 7次調査の概要.....	3
III 1号墳の調査.....	5
1. 現況と調査の経過.....	5
2. 墳丘・周溝.....	5
3. 埋葬施設.....	9
4. 小 結.....	18
IV 2号墳の調査.....	18
1. 調査の概要.....	18
2. 墳丘・周溝.....	19
3. 埋葬施設.....	20
V その他の遺構と遺物.....	27
1. 土壌墓.....	27
2. 土坑.....	31
3. 住居跡.....	32
4. 溝他.....	32
5. 2区の調査.....	33
6. そのほかの遺物.....	33
VI 終わりに	

挿図目次

Fig.1 遺跡位置図(1/50000).....	2
Fig.2 調査地点位置図(1/4000、1/2000).....	2
Fig.3 遺構配置図(1/600).....	4
Fig.4 1号墳地形測量図 昭和53年調査前(1/500).....	5
Fig.5 1号墳全体図(1/300).....	6
Fig.6 1号墳周溝・盛土出土遺物(1/3).....	7
Fig.7 1号墳周溝・墳丘土層実測図(1/80).....	8
Fig.8 1号墳石室実測図(1/80).....	10
Fig.9 1号墳石室俯瞰図(1/100).....	11
Fig.10 1号墳堀方実測図(1/100).....	11
Fig.11 1号墳墓道断面図(1/80).....	12
Fig.12 1号墳遺物出土状況(1/100).....	12

Fig.13	1号墳石室、墓道出土遺物実測図1(1/3)	13
Fig.14	1号墳石室、墓道出土遺物実測図2(1/3、1/4)	14
Fig.15	1号墳石室、墓道出土遺物実測図3(1/3)	15
Fig.16	1号墳石室、墓道出土遺物実測図4(1/2)	16
Fig.17	1号墳石室、墓道出土遺物実測図5(1/2)	17
Fig.18	1号墳出土土鈴鏡実測図・拓影(2/3)	18
Fig.19	2号墳全体図(1/400)	19
Fig.20	2号墳周溝土層図(1/80)	20
Fig.21	2号墳石室実測図(1/80)	21
Fig.22	2号墳閉塞状況(1/80)	22
Fig.23	2号墳遺物出土状況(1/100)	22
Fig.24	2号墳出土遺物実測図1(1/3)	23
Fig.25	2号墳出土遺物実測図2(1/3、1/4)	24
Fig.26	2号墳出土遺物実測図3(1/2)	25
Fig.27	2号墳出土遺物実測図4(1/2)	26
Fig.28	2号墳出土遺物実測図5(1/2、2/3)	27
Fig.29	土抗墓実測図(1/40)	28
Fig.30	土抗墓出土遺物1(1/4)	29
Fig.31	土抗墓出土遺物2(1/3)	30
Fig.32	SX037実測図、出土遺物実測図(1/40、1/3)	31
Fig.33	土坑実測図(1/40)	32
Fig.34	住居跡実測図、出土遺物実測図(1/60、1/3)	33
Fig.35	その他の遺物実測図(1/1、1/4)	34
Fig.36	早良平野出土の新羅系土器	

I はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

古くから夫婦塚として親しまれてきた金武古墳群H群は、昭和54年の発掘調査で2基の古墳が確認された。そのうち墳丘、石室が残る2号墳は、平成元年に市史跡に指定され現在に至っている。

埋蔵文化財課では、平成14(2002)年より西区金武地区における集落基盤整備事業の実施にともなう埋蔵文化財の発掘調査を行っている。平成16年度には乙石地区の圃場整備が計画された。この乙石地区事業地南西端は、夫婦塚古墳2号墳(金武古墳群H群)に接しており、また事業地内には昭和54年に主体部の調査を行った1号墳が田面下に残っているはずであった。事業計画についての協議を繰り返した結果、2号墳周辺の田面の一部が削平を避けられず本調査対象地となった。この部分以外は浅い盛り土で圃場整備の調査対象とはならないが、対象地だけでは古墳の全容を把握し難く、また浅い表土上での工事による古墳への影響が懸念された。このため古墳とその周囲について、国庫補助事業として範囲確認調査を行うこととなった。調査は圃場整備に伴う調査に併行して平成16年4月5日から10月28日に実施した。調査では1、2号墳の周溝等の遺構を新たに検出し、2基の古墳の形態が方墳であることを確認することができた。調査終了後は、削平されない遺構と遺構面について、真砂で埋め戻しを行っている。

17年度には、出土遺物等の整理事業を行った。本書は今回の調査成果を報告するものであるが、古墳の時期、内容を把握するためには、昭和53年の調査(金武古墳群3次調査)成果が不可欠である。そのため今回の報告は、前回の調査報告の一部再録を含めて行う。

また、調査にあたっては金武地区圃場整備組合、2号墳の地権者である牛尾光昭氏のご理解とご協力を得た。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

教育長 植木とみ子

文化財部長 山崎純男 埋蔵文化財課長 山口謙治 第1係長 田中寿夫 第2係長 池崎譲二

調査担当 吉留秀敏 宮井善朗 池田祐司 木下博文

調査は吉留が表土剥ぎ、宮井、木下が埋め戻し、他を池田が担当した。

II 遺跡の立地と調査の概要

1. 立地

早良平野を取り巻く丘陵には約700基の後期群集墳が確認されている。そのうち西側の長垂山塊東麓には広石、羽根戸、飯盛等の古墳群が分布する。金武古墳群は、そのやや奥まった位置、日向峠付近に発する日向川によって形成された扇状地および周辺の山麓に位置し、145基から構成される。現在、北側を金武古武、南側を金武乙石と呼称し、それぞれR群、H群までの支群に分けている。

2. 金武古墳群

これまで6次に及び調査が行われ、今回次数を整理した(表1)。1次調査では金武E群の3基、2次調査では乙石C群の3基を調査し6世紀末から7世紀とする。報告では金武古墳群についての詳しい記載が成されている。3次調査は別称夫婦塚古墳の調査で、今回報告する7次調査と同じ古墳である。調査内容については後述する。4次調査のL群(別称吉武塚原古墳群)は、金武古墳群の中では最も古い6世紀前半から造られ、新羅土器3点が出土している。5次調査はK群(別称吉武熊山古墳



Fig.1 遺跡位置図 (1/50000)

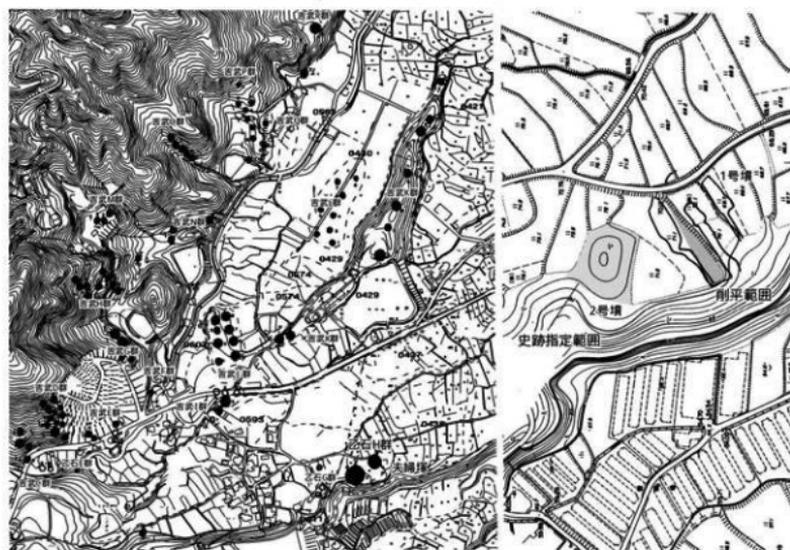


Fig.2 調査地点位置図 (1/4000、1/2000)

群)の調査で、装飾をもつ7号墳の保存のために周辺の3基を含めて行われた。報文では金武古墳群の変遷が詳述されている。7号墳は市指定文化財となっている。6次調査のG群4基の調査では4号墳から新羅土器が出土している。なお、1971年『金武古墳群発掘調査報告書』と題して古墳2基等の報告がなされているが、現在では西山古墳群1次調査(調査番号7002)として登録している。

3. 夫婦塚古墳

今回調査を行ったH群の2基は扇状地状緩斜面の際に立地し、南側は比高差17mほどの急斜面となる。1号墳が標高71m、2号墳が73mを測る。

2基の古墳は古くから知られ、加藤一純著「筑前国続風土記附録」の早良郡金武村の項に、「また乙石の北二丁斗に石窟二あり、共に口は南にむかへり」という記載がある。今日、地上で墳丘が確認できるのは1基のみであるが、地元では夫婦塚と呼ばれ、もう1基は明治の未年に開墾されて農地になったと伝えられていた。昭和53年、その地で新たな地下げ工事が行われる際、地元の方の注意により調査(金武古墳群3次調査)を行い、現存のもの(2号墳)と同規模の石室(1号墳)を確認した。その所在位置が「附録」の記述とほぼ一致すること、古墳の規模が共に大きく当時としても目立つ存在であったと考えられることから「附録」記載の古墳と特定した。2基の古墳は昭和54年の遺跡分布調査の際に金武古墳群乙石H群として登録されたが、通称夫婦塚として知られ、平成1年には現存する2号墳が「夫婦塚2号墳」として市史跡に指定されている。

昭和53年の3次調査では、1号墳は表土下に残存していた石室と墓道の一部、2号墳は石室内の調査、報告が行われた。石室は1号墳は単室構造、2号墳は複室構造をもつが、いずれも荒らされていた。築造年代は1号墳が6世紀末から7世紀初頭、2号墳が6世紀後半から末とされている。またその他に1号墳から鉄製武器、装身具、馬具、飾金具、五鈴鏡などが、2号墳からも武器、馬具、飾金具などが出土している。両古墳とも石室規模、副葬品等から同一系譜の首長墓と推定されている。

4. 7次調査の概要

今回の7次調査は、現在田面となっている1号墳周辺の表土を重機で剥くことから行った。地山は花崗岩風化土の再堆積で、表土剥ぎの段階に遺構を確認した。3次調査を行った1号墳の石室は、石材が除去され、堀方も削平を受けていた。今回確認した遺構は1号墳の周溝、石室堀方、墓道で、2号墳の周溝の一部、土坑墓、土坑等である。これにより古墳規模は1号墳が幅22m、2号墳が幅35mほどの方墳であることがわかった。今回の報告では、古墳については3次、7次の調査の遺構、遺物実測図を併せて掲載し、3次調査報告を引用、抜粋しながら両調査の成果を織り交ぜて通常の古墳の報告の体裁を採る。3次、7次それぞれの成果を区別できるような記述を心がけるが、煩雑を避けるためにははっきりしない部分があろう。ご容赦頂きたい。また、当初圃場整備事業に伴う調査を想定していたため、Fig.3の道の南側を1区、北側を2区とした。遺構を検出したのは主に1区で、2区では2号墳の周溝の一部であるSD032を確認した。2区については最後にふれている。

1980 『県道二丈・大野線関係埋蔵文化財調査報告1』福岡市埋蔵文化財調査報告第52集：1、2次

1980 『四箇周辺遺跡調査報告書(3) 夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告第51集：3次

1980 『吉武塚原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告第54集：4次

1981 『重要遺跡確認調査報告I』福岡市埋蔵文化財調査報告第68集：5次

1998 『金武古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告第579集：6次

1971 佐田茂 松本筆『金武古墳群発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告第15集：西山古墳群

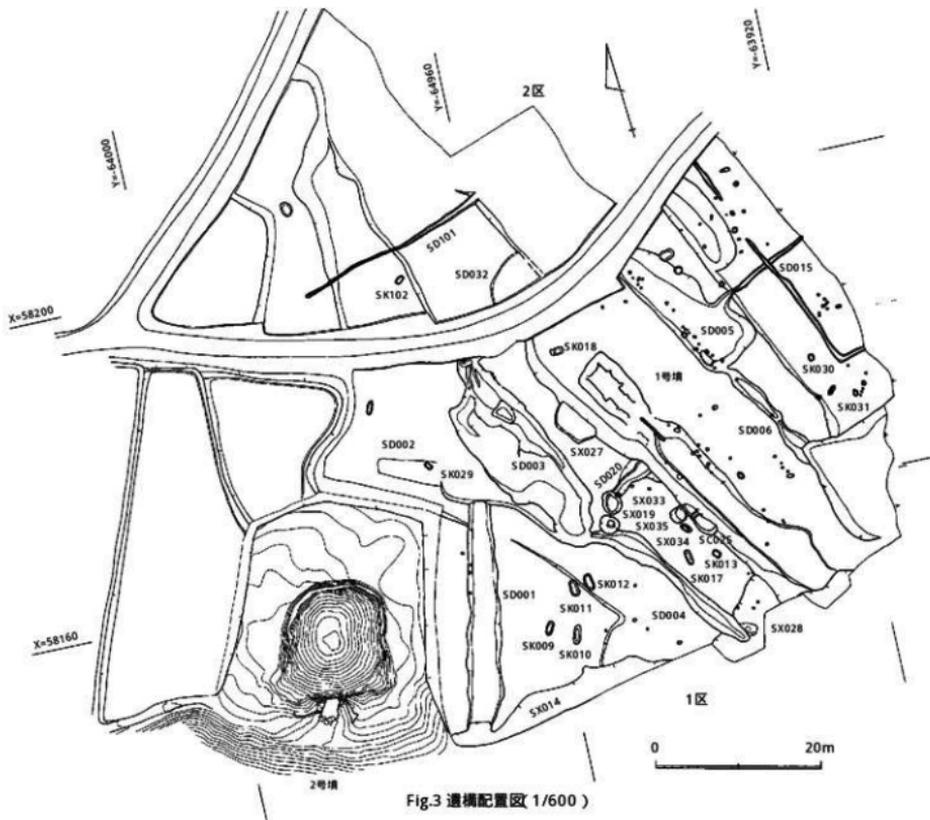


Fig.3 遺構配置図 (1/600)

金武古墳群調査一覧

調査番号	地点	回数	所在地	調査原因	古誌	開始	終了	担当者	経費	略号
7805	1	吉武E群	吉武	道路建設	3	781001	781020	山崎龍雄・柳沢一男	52	KYK-E
7806	2	乙石C群	金武字乙石	道路建設	3	781020	781120	山崎龍雄・柳沢一男	52	KOY-C
7818	3	乙石H群	金武字乙石	農地改良	2	780808	781000	塩屋勝利・二宮忠司	51	KOK-H
7906	4	吉武L群	吉武字塚原	圃場整備	8	790100	790400	二宮忠司	54	KYK-L
7909	5	吉武K群	吉武字無山	重要確認	4	800315	800510	柳沢・横山邦雄	68	KYK-K
9635	6	吉武G群	吉武字七郎谷	資材置き場	4	960820	970201	荒牧宏行	579	KYK-G
200423	7	乙石H群	金武字乙石	重要確認	2	2004.4.5	2004.10.20	池田	809	KOK-H

Ⅲ．1号墳の調査

1．現況と調査の経過

1号墳は明治末の開墾により墳丘と石室の大部分を失っている。昭和53年の3次調査地点の現況は畑地で、西側は一段高い水田、南側は里道を挟んで一段低い水田、東側はさらに低い水田であった(Fig.4)。3次調査では調査区に限られ、石室と墓道約半分の調査を行っている。

7次調査では周辺の広い範囲の表土を重機で掘削し、新たに周溝と墓道の延長を確認した。3次調査区も再掘削し、残っていた測量用の釘で図を合わせることができた。また、測量レベルの基準が異なっているため、残っている遺構からその差を60cmと特定し、7次調査のレベルを使用した。調査は乙石遺跡2次調査と併行して行った。

2．墳丘・周溝

(1)周溝と墳丘形態

7次調査において石室、墓道にほぼ並行する溝SD003、004、005、006と浅い落ち溝SD032を検出した(Fig.5、7)。SD003、005、034は石室の周りをコの字状に巡る。遺物は少ないが埋土は近似し、周溝になると考えられる。またSD020は墳裾が想定できる箇所にあたり、関連する可能性がある。SD004と006はSD003、005から南側に延びる溝で、内側のプランが直線的に揃い、墓道に並行する。

SD003 石室西側の周溝である。平面プランは長方形に近く、北側、西側で狭まる。西側、南側は浅くプランがはっきりしない。幅は広いところで9mを測る。断面形態は西側は緩やかだが、東側は急に立ち上がり、深いところで55cmを測る。埋土上部は腐植土と思われるやや粘質の暗褐色土で古代までの遺物を含む。下部は淡い灰茶褐色土で早い時期に堆積したものであろう。地山との区別が分かりづらく、特に東側の立ち上がりの検出は困難であった。遺物は上下層から若干出土した。最上部に近世までの遺物が混じる以外は須恵器、土師器である。

SD004 SD003から南に続く溝で、幅160cmから220cm前後、深さ30cmを測る。断面はやや急な

レンズ状を呈す。北端で曲がる以外は直線的で、南端は斜面に消える。SD003との接合部は両溝とも曲がり、不自然な感がある。埋土はSD003と同様で、遺物は須恵器の襍の小片1点のみである。

SD005 石室の東側にSD003と対称に位置する溝で平面形は長方形を呈す。幅6mから8m、深さ20cmほどを測り、断面は浅いレンズ状を呈す。SD003と同様に石室側の北端は直線的で、外側はやや不整形である。出土遺物は少なく土師器の小片が少量出土した。他は混じり込みと思われる白磁の小片、土鍋である。

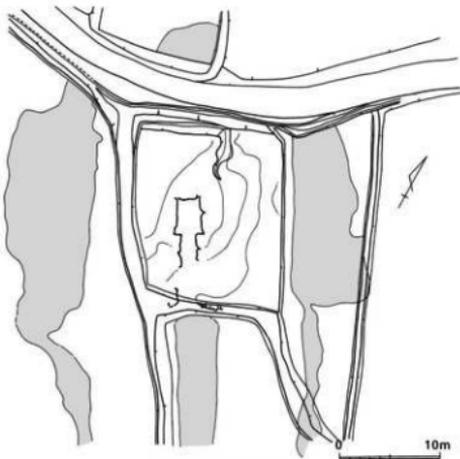


Fig.4.1号墳地形測量図 昭和53年調査前(1/500)

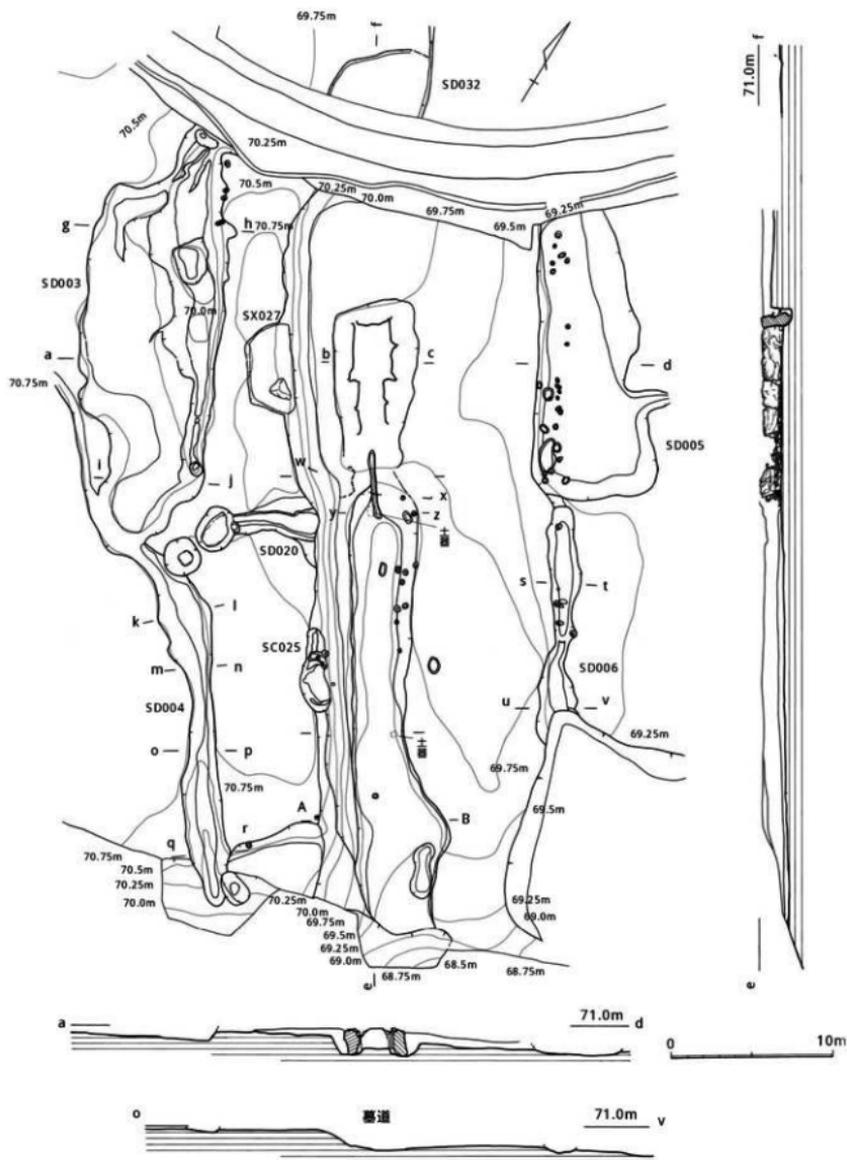


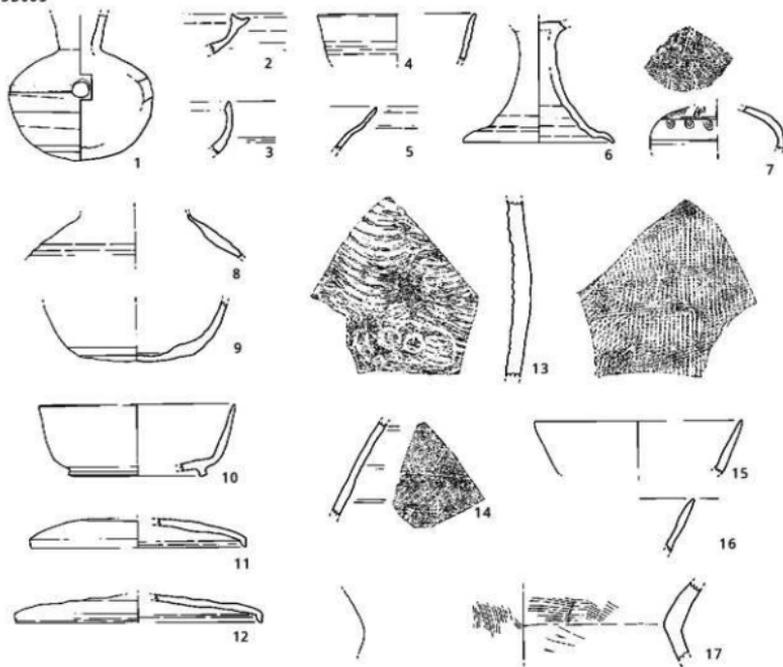
Fig.5 1号墳全体図(1/300)

SD006 SD005から南へ直線的に延びSD004と対をなす。南側は農地の造成により削平される。幅100cmから180cm、深さ30cmほどで断面レンズ状を呈す。外面平行叩きの須恵器の残片が1点出土した。墓道南端部でまとめて出土したものと同一個体かと思われる。

SD032 厚さ10cmほどの暗褐色土が北側に弧状の平面プランを描き溜まる。東半は削平を受けている。遺物は出土していない。

SD020 1号墳の墓道と周溝の間を東西に走る溝で、耕作に伴い巨石を埋めた穴SX033に切られる。幅80から180cm、深さ10-30cmを測る。覆土はやや粘質の灰茶褐色土で上部には耕作土が混じる。近世陶器1点と須恵器の残の小片10数点が出土した。近年の耕作に伴うと考え掘削したが、墳裾が想定される箇所に当たり、須恵器が出土していることから古墳に関連する可能性もあろう。底が掘り足りているか疑問が残る。

SD003



SD005



SX027



Fig.6 1号墳周溝、盛土出土遺物(1/3)

出土遺物(Fig.6) 1から17はSD003、18はSD005からの出土である。1から13は須恵器である。1は甕で最大径部に浅い段をもち、その直下まで削りを施す。最下層から出土した。これ以外は2層上部より上からの出土である。2は坏身で受け部の立ち上がりは小さく、胎土は精良である。3、4は高坏の坏部か。5は鈍い稜で屈曲する甕の口縁部、6は高坏の脚で回転などで成形が顕著である。7は新羅土器で壺の肩部である。最大径部に2条、その上に3本の細く浅い沈線を施し、円弧、三角文を沈線で描く。最大径部より上に自然釉が掛かる。8は小片で壺の胴部と考えられる。9は同じく壺の底部で底は手持ちの削り調整である。10は高台付きの坏、11、12は端部が小さく屈曲する蓋である。13は甕の胴部で外面は平行叩きの後に所々に掻き目状の擦痕、内面は同心円状の当て具痕が明瞭に残る。14は甕の頸部で浅い沈線の間に波状文を施す。15は土師器の杯で立ち上がりが急で復元口径12.7cmを測る。16は小片で壺の口縁部と考えられる。17は土師器の甕で口縁内外に刷毛目、内面胴部に横方向の削りが見られる。この他に須恵器の甕、坏等の破片、土師器の甕等の小片、土師皿、近世磁器が中層の黒色土より上に少量入る。

18はSD005出土の土鍋で外面で、内面刷毛目を施す。中世の混じり込みであろう。

(2) 墳丘

3次調査の段階ですでに盛り土のほとんどが削平を受けていた。Fig.7a-b、c-d、e-f断面に3次調査時で確認された厚さ50cmほどの盛り土がみられる。また、墓道の土層Fig.11にも盛り土が観察されている。7次調査段階では3次調査のトレンチも削平により残っておらず、石室の西側に新たに設けたトレンチで厚さ30cmほどの盛り土を確認した(Fig.7a-b断面)。層は旧表土と考えられる。この堆積はくぼみ状の部分に溜まったものでFig.5のSX027とした範囲に限られる。

出土遺物 SX027から19が出土した。土師器の甕または甔と考えられる。外面に横方向の工具の木口痕が見られる。他に若干の土師器片があり同一個体であろう。

3. 埋葬施設

1号墳の主体部は複室構造の横穴式石室で、南南東方向(S-26°-E)に開口する。明治期の開墾時に大規模な破壊を受け、天井石はなく、玄室、羨道ともにハツバによって破砕され、床面から約1mの高さで残存していた。石室の構築石材は花崗岩の巨石を用い、敷石は花崗岩の他に所々変岩系の礫も用いている。覆土は上部50cmが開墾時の整地層で、その下にはハツバで破砕された石材が隙間なく投棄されており、その下は埋土になる。埋土上位は近世、近代の陶磁器類を含み、下位は須恵器、鉄製品等古墳時代までの遺物をまじえている。また、羨道南半部は昭和53年の工事で新たな破壊を受け、4個の石材を抜かれているようである。3次調査終了時は側壁下部を据えた状態であったが、7次調査次には側壁は抜かれ、裏込め他の礫が散乱し、抜き跡に畚等の廃棄物を捨てた状態であった。

石室掘方 平面は隅丸不整形長方形を呈し、玄室部は幅約6.15m、深さ1.3m、羨道部幅約4.5m、深さ約0.8mを測る。床は敷石直下が堀底となる。石室の基底は石室平面に従い、石材の規模に応じて掘削を行っている。また、周壁の裏には人頭大の転石、割石が裏込めとして詰められている。

玄室 平面形は前部が開く長方形を呈し、奥壁幅2.1m、前幅2.8m、左右壁長3.6mを測る。右壁2枚、左壁1枚の花崗岩の巨石を立てて構築する。特に左壁は2号墳と比較すると天井まで1枚であった可能性がある。各石材上面に発破痕が残り、上部は破砕されたと考えられる。石材の接合部には灰色粘土で目張り成されている。床面には敷石があったと考えられるが、殆ど剥がされ羨道部に投げ出されていた。中央部床面には幅0.25m、深さ0.15mの溝が東西方向に掘られ、玄室を仕切る施設の痕跡と考えられる。

羨道 側壁は直線的に延びるが、端部は石材が抜かれはつきりしない。右壁は袖より第3石目が

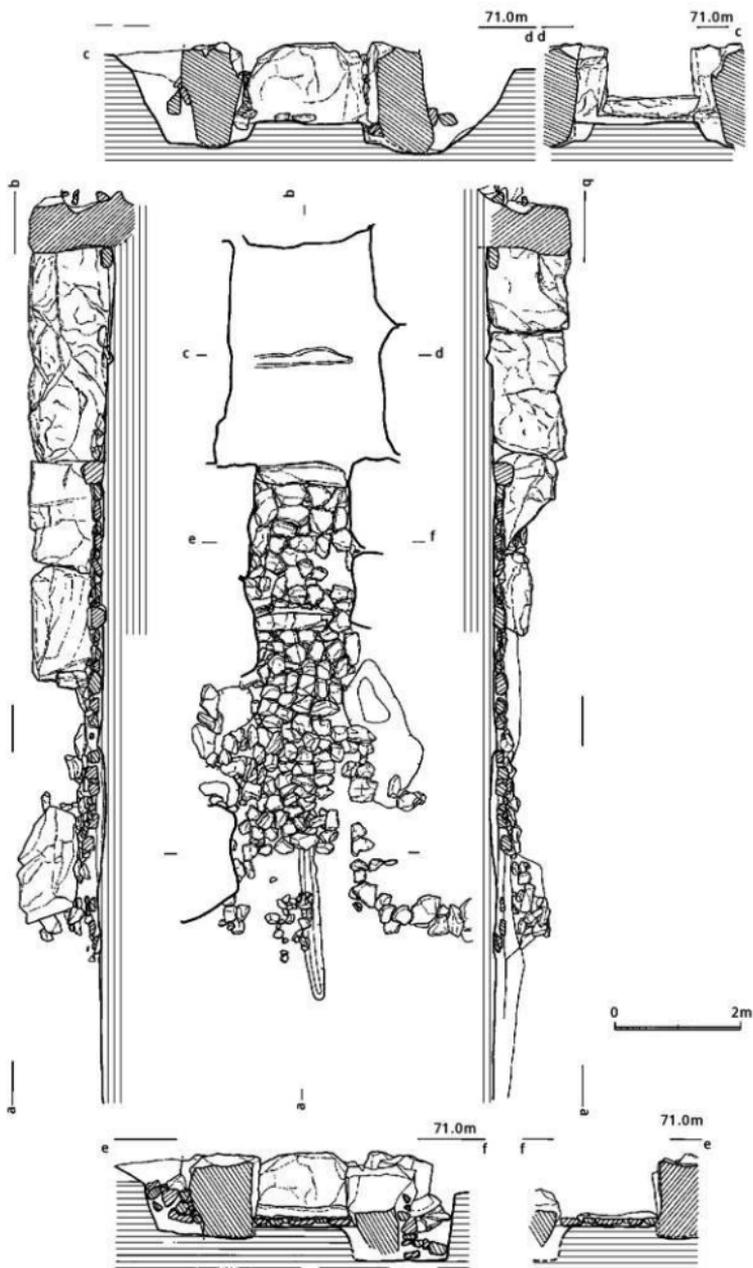


Fig.8.1号墳石室実測図(1/80)

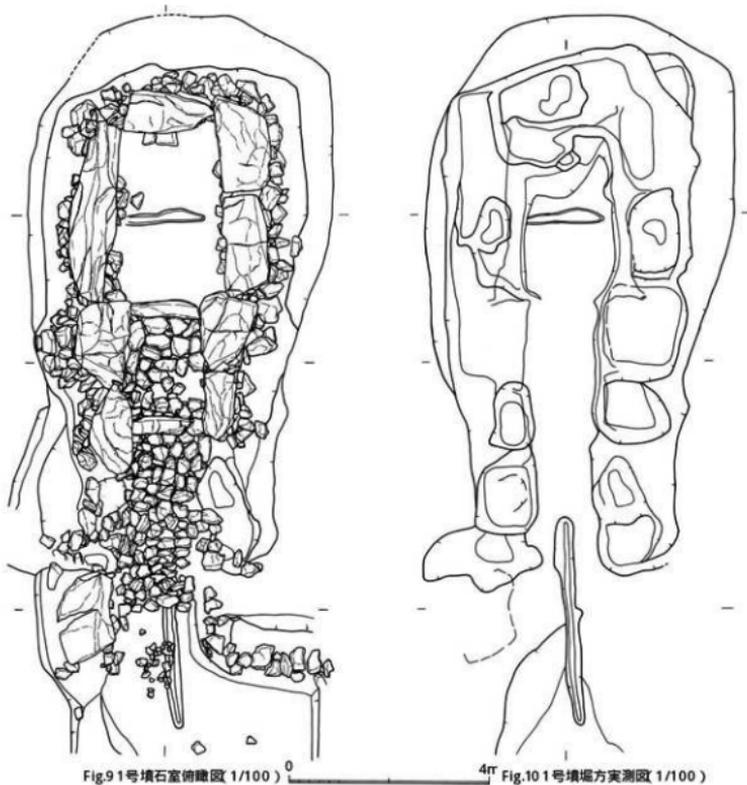


Fig.91号墳石室俯视图 1/100 0 4m Fig.101号墳塚方案測図 1/100

ら後、左側は同じく第3、4石目の石材が除去されており、抜き跡によって右壁が4枚、左壁が5枚の石材で構築されていたと考えられる。右壁4石目は楔石と思われる礫のみで掘り込みが残らない。Fig.11土層図4層が近年の石材抜き跡と考えられる。また、左側の抜かれた石材は他と比べ小振りのものである。両側壁の現存高は、床面から最大1m程度で、上部はハツパで破砕されている。羨道長は左壁で7mを測る。床面に玄門部と、玄門から2.35mの位置に仕切り石を据えている。また、玄門から約6.3mの羨道部はほぼ全体に扁平な割石を用いて敷石が現存する。敷石上には土器、鉄器等の遺物が散乱し、五鈴鏡が出土している。

閉塞施設 後世の破壊がひどく断定できないが、第1仕切石の位置からなされていたことが確認できた。仕切石の上に扁平な割石を数段ひかえ積みし、さらに転石などを乱積みしていたと考えられる。

墓道 墓道は羨道端より連続して掘込まれる。石室主軸のほぼ延長上に直線的に延び、南側斜面に消えるまでの長さ約30mを測る。堀方の西側は高さ70cmほどの急な斜面で、幅30cmほどの平坦面を経て断面浅いレンズ状の掘込みとなる。斜面は6世紀代の住居跡5C025を切る。東側の掘込みがどれほどのものであったかは分からないが、列石のレベルから高くとも40cmほどと考えられる。床面は羨道部より10cmほど深く、羨道端より15m部分までほぼ水平で、南端部では30cmほど下がる。浅い掘込みは羨道端部付近で幅4.2m、深さ20cm、ややすぼまる部分で3.1m、深さ12cm、広がる最大部で5.9m、深さ25cmを測る。覆土は、やや粘質の暗褐色土である。羨道端から15mは3次調査で

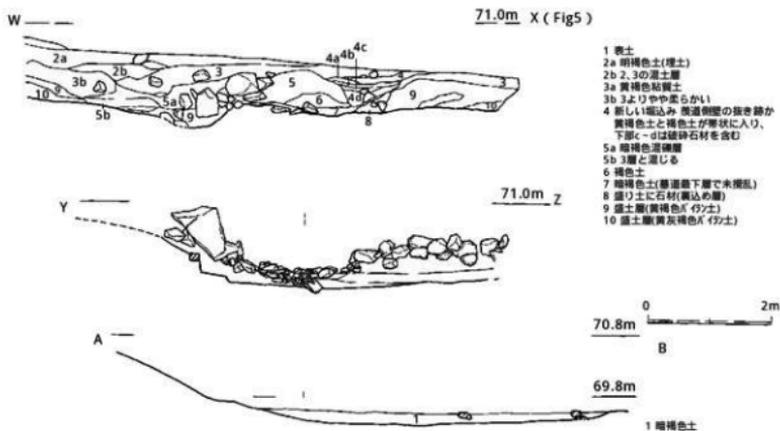


Fig.11 1号墳墓道断面図 (1/80)

その南側は7次調査で掘削した。3次調査部分の縁は7次調査時に掘り足している。遺物は羨道入り口部分に集中する他は少ない。中央部分で土師器、須恵器小片が少量であるが集中し、両端部で平行叩きの須恵器の大破片が散乱していたが形になるほどではない。

溝 羨道南半部から墓道にかけて床面中央に幅約25cm、深さ15cm、長さ4.1mの溝が掘られる。排水のための施設であったと考えられる。7次調査時も若干の削平があったものの残存していた。

列石 羨道右壁部から石室主軸に対して直角に東へ続く列石で、延長2.6mを確認した。さらに延長するかは調査範囲の関係で不明である。羨道床より30cm高い位置に3、40cm大の礎が1、2段並ぶ。7次調査時は残っていない。西側では確認していない。出土遺物(Fig.12~18)

玄室、羨道、墓道内の遺物を一括して示した。攪乱のため原位置を保つものは殆どなく、かなり移動していると考えられるが、Fig.12に写真から判別できる範囲で出土位置を示した。玄室は攪乱により遺物は少なく、羨道には敷石の上に遺物が残る。墓道では北端部と南部に破片であるが遺物が集まる箇所があった。このほか、玄室、羨道から製錬滓が約25個出土している。土器1から34と金属器1から55は3次調査時に既報告で、前回と同じ順序で示した。この分についての詳細は前報告を参照されたい。次にそれぞれの未報告分、7次の出土品を追加掲載している。また前報告では古代から近代までの遺物が報告されているが今回は省いた。金属器については巻末に一覧表を掲載している。

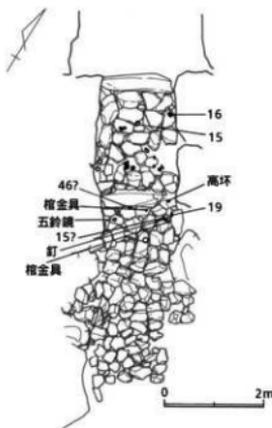


Fig.12 1号墳遺物出土状況 (1/100)

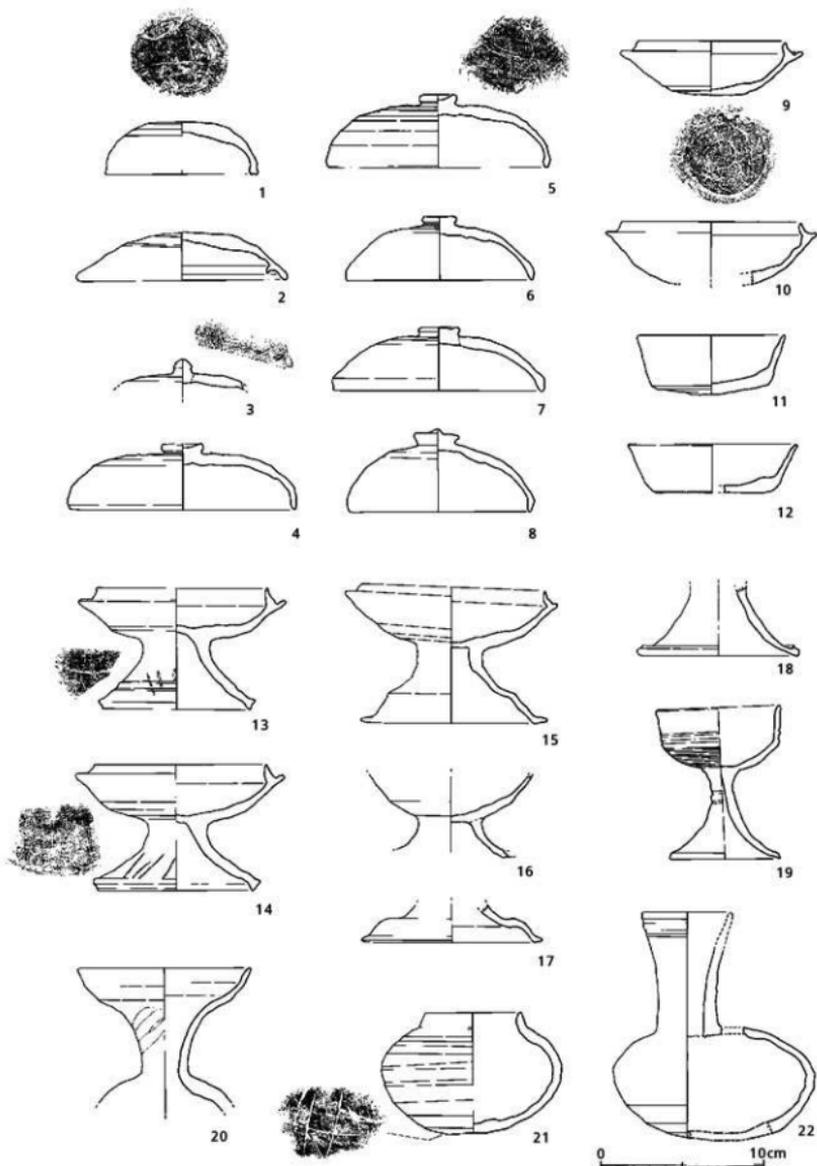


Fig.13 1号墳石室、墓道出土遺物実測図(1/3)

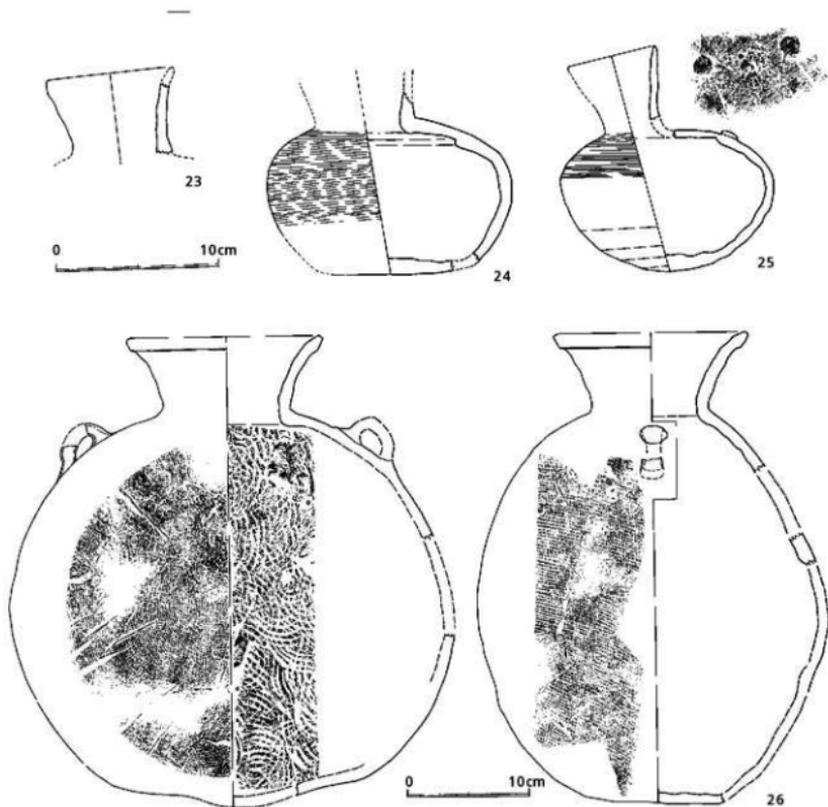


Fig.14 1号墳石室、墓道出土遺物実測図(1/3、1/4)

土器(Fig.13～15) 1から26は須恵器である。完形品は殆どなく、他に胴部破片がある。1から8は蓋、9から12は坏身、19までは高坏である。1、3、5、9、13、14にヘラ記号が見られる。20は甕、21は埴、25までは平瓶、26は大型提瓶である。21胴部下部にヘラ記号がある。27から34は土師器で築道南半、墓道において出土した。27、31から34は甕、29は高坏、30は甕の取手である。35から41は3次調査出土で今回追加報告分である。35から37は須恵器の蓋。38は甕の口縁部または高坏の脚で内外面に自然釉が掛かる。39、40、41は須恵器の高坏の脚である。42は掘方出土の須恵器の坏身で7次調査の玄室部分出土片と接合した。底部のヘラ削りは手持ちである。43から45は7次調査で出土である。43は築道攪乱中出土の須恵器の甕である。44、45は墓道中央付近の出土で44は土師器の甕の口縁、45は土師器の取手でいずれも器面が荒れている。

金属製品(Fig.16～18) 1は玄室出土の銅芯金張りと考えられる耳環である。これ以外に玄室出土品はない。以下特に断らないものは鉄製品である。2から13は鉄鏃として報告されている。2は他

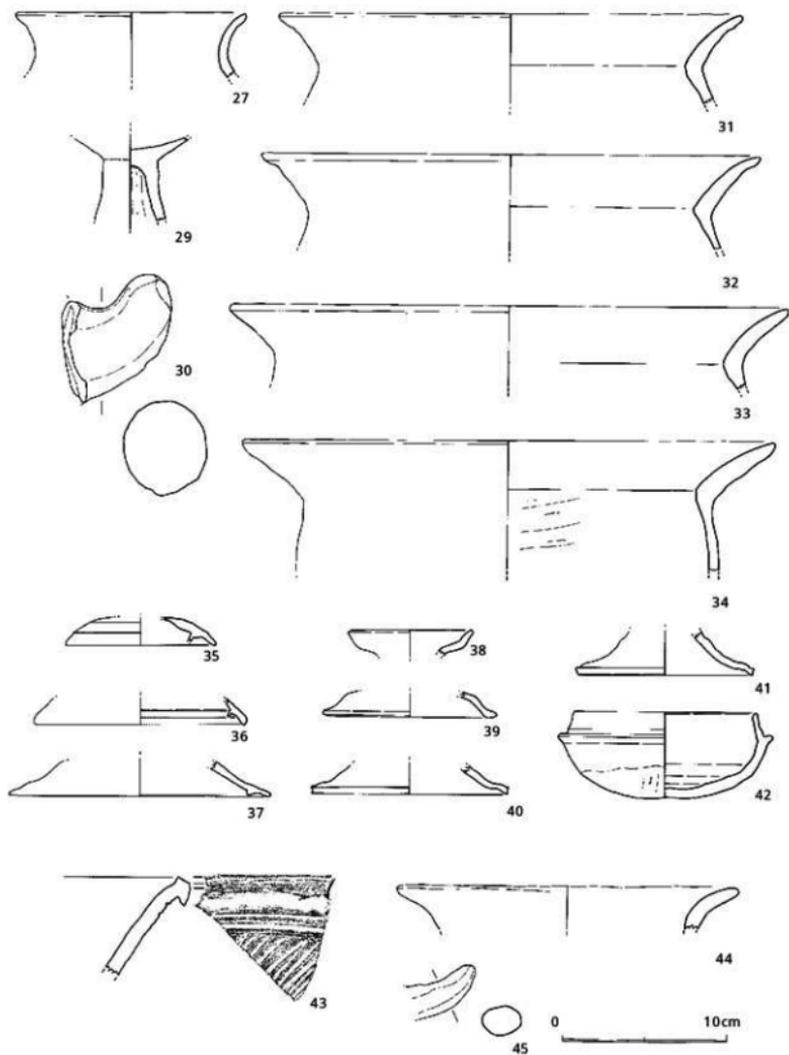


Fig.15 1号墳石室、墓道出土遺物実測図(1/3)

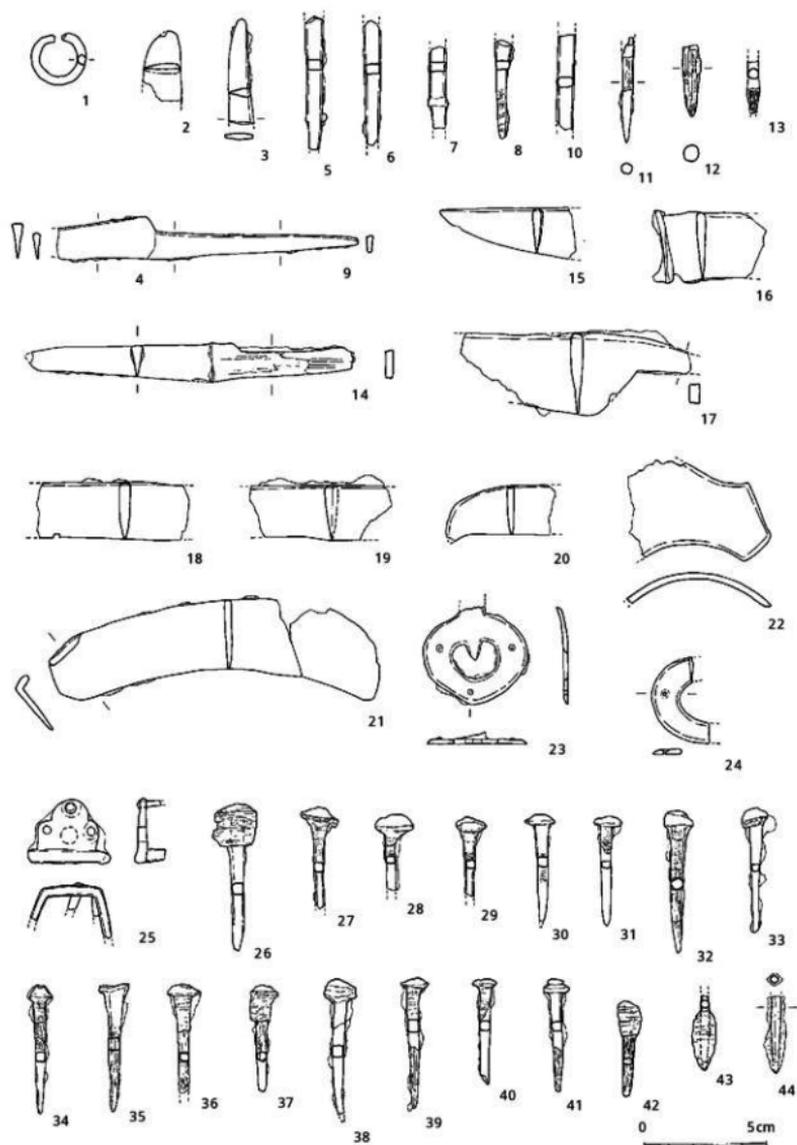


Fig.16 1号墳石室、墓室出土遺物実測図(1/2)

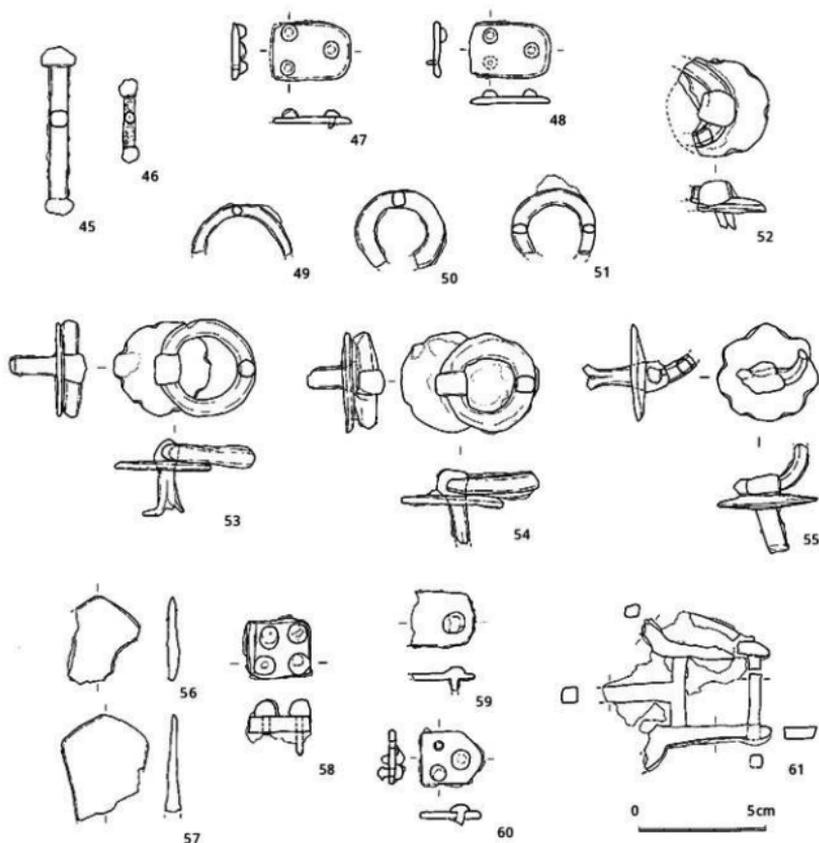


Fig.17 1号墳石室、墓室出土遺物実測図(1/2)

の利器の可能性がある。5は篔被が明瞭に突出している。8、11から13には木質が残る。また、4、9は接合し刀子であることが解った。14は刀子で木質の柄が残存する。15から19は直刀である。16には不明瞭な立ち上がりがあり鎌の可能性はある。20、21は鎌である。22は厚さ0.2cmの鉄板を曲げ、端部を山形につくる。鞍金具の一部か。23、24は杏葉で23には透かしの上端が舌状に突き出す。25は帯金具で平面三葉形を呈す。中央に穿孔を施し三方に鉾孔をもつ。26から44は鉄釘で頭部直下に横方向、端部側に縦方向の木質が残るものが多い。45は留め金具と考えられるがはっきりしない。46は弓金具で横方向の木質が残る。47、48は馬具の帯金具で器面三方に円頭鉾を付す。49から55は棺金具で木棺に付していたものか。

56から61は3次調査出土で今回追加報告する。56、57は鉄鎌の圭頭刃部、58は方形帯金具、59、60はコハゼ形の帯金具、61は鉸具である。

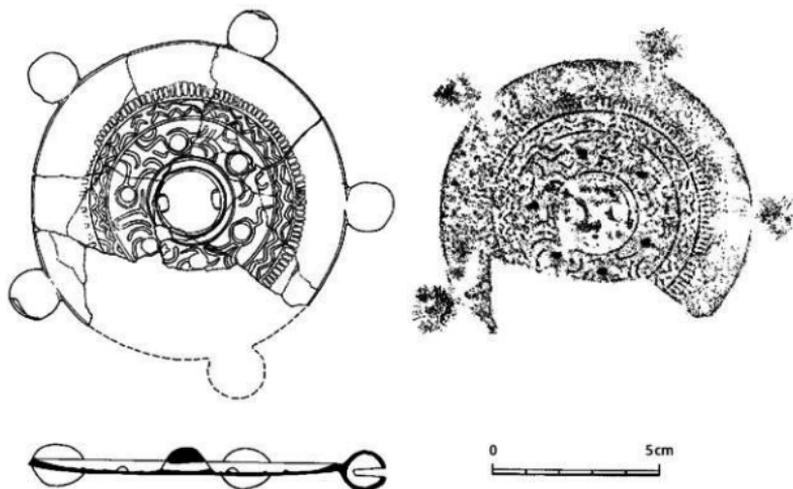


Fig.18 1号墳出土五鈴鏡実測図・拓敷(2/3)

Fig18は青銅製の五鈴鏡で3次調査時に羨道敷石直上から出土した。1/3を欠損する。鈴と鏡は同時に鑄造され、鈴内部の珠は小石で、2つに現存する。鏡面の文様は外区に櫛齒文に続いて複線山形文が圏線に画されてめぐる。内区は6個の孔を配し、蕨手状の線文を配すが残りが悪い部分がある。鈕の周りには2条の圏線が巡り、孔は方形を呈す。全体に器肉の薄い鏡である。

4. 小結

1号墳での知見をまとめておく。主体部は単室構造の横穴式石室で、墳形は周溝の形態、列石の配置より方形である。盛り土は僅かに確認されたのみであるがSD003、005、034、羨道端部の列石に囲まれた範囲で墳丘規模は幅、長さ共に21から22mほどと考えられる。SD021は丁度墳裾前面に位置し周溝の痕跡の可能性があるが、墳丘に沿って掘削された耕作用の水路とも考えられる。墓道は直線的に延び、西側に70cm以上の段差を成す。これに並行してSD004、006が走るが、その間については現状からはわからない。溝の床面はSD005、006は西側より低い(Fig.5断面)

IV 2号墳の調査

1 調査の概要

2号墳は1号墳の南西約40m、標高73mの位置に築造される。墳丘が小山状に残り、周囲には南面を除いて耕地が巡る。主体部は複式の横穴式石室で南西側に開口し、羨道から約5mで斜面となり急激に落ちる。3次調査では石室の実測および床面の掘削を行い、少なからぬ遺物が出土した。その後、墳丘の平板測量を行っている。7次調査では東、北東側の耕地が圍場整備範囲に含まれるため調査を実施した。表土直下の地山で周溝と考えられる溝SD001、002を確認し、方形の墳丘プランを確認した。また、調査終了後に墳丘および周囲の航空測量を行っている。現況で羨道部端から西にある石積みは石室内に攪乱されていた礎を近年積んだものである。

なお墳丘が残る範囲(Fig.2)、大字金武頭ノ尾1666・1667番地他については、平成1年3月30日付けで夫婦塚2号墳として市史跡に指定されている。

2. 墳丘・周溝

周溝(Fig.19, 20) 古墳の東、北東側で現況の墳端に併行する直線的な溝SD001、002を検出した。周溝と考えられる。SD001は現存する墳丘東側の墳端から3m前後離れた位置で延長30m弱を確認した。幅は2.4mから4.4m、深さ15cmで浅い断面レンズ状を呈す。北端は耕地造成により削平を受け失われる。南端は僅かに西へ曲がり南側への斜面に切られる。覆土は茶褐色粘質土である。SD002は鉄分の沈着等、床面の痕跡のみが残存し、埋土は部分的に1cm前後が残るのみである。北側の現存墳端から2m前後離れた位置を走る。東側は削平を受け、西側は痕跡も確認できない。残りの悪さから、平面プランに実際とのズレがある可能性が残る。遺物はSD001で土師器の髹と考えられる破片が少量出土したのみである。

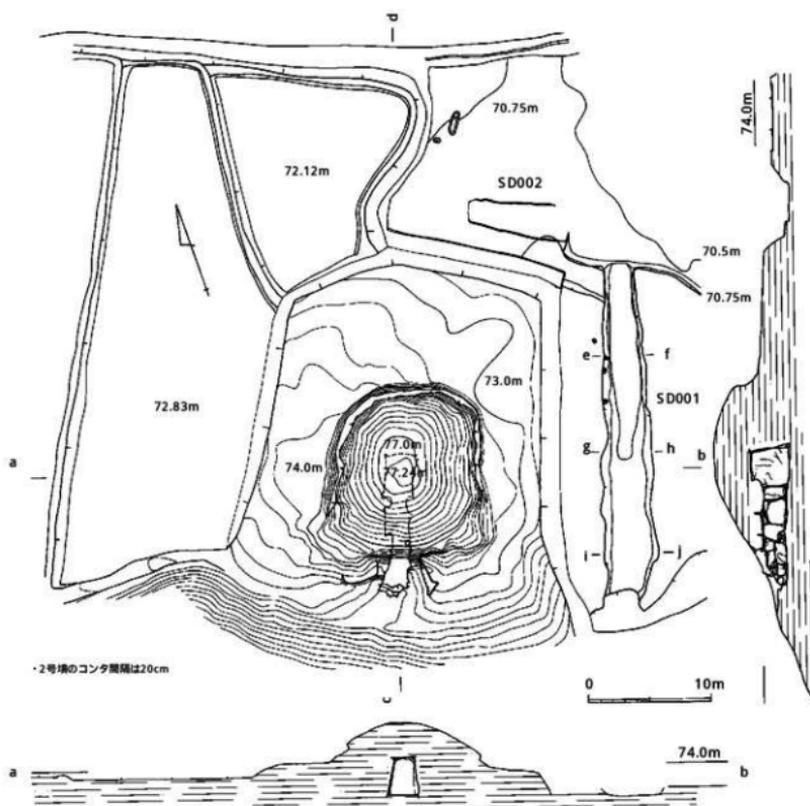


Fig.19 2号墳全体図(1/400)

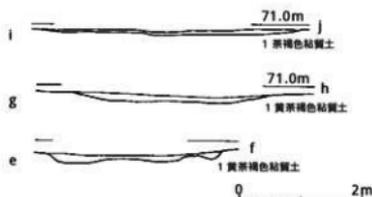


Fig.20 2号墳周溝土層図(1/80)

墳丘形態(Fig.19) 2号墳は現況とSD001、002の配置から2段築造の方形プランと考えられる。現存する墳端は削平はされているものの、原形を反映しているであろう。石室の中軸を中心とすると、SD001は南側がやや開き、1段目の平面プランは南側で幅約35.2m、北側約33.4mが復元できる。2段目は北側および東西側の北半が崩壊による崖面となり、北側は挟れている。このため北半は現況より一回り大きくなると考えられるが、1段目と同様に南側がやや広がる方形になると考えられる。南側は比較的残りが良いと考えられ、墳頂付近から東西端への稜が残る。

3. 埋葬施設

本墳の主体部は横穴式石室で複室構造をもち(Fig.21)、主軸をN-17°-Eにとる。石室は調査前から開口していたが保存状態は良好である。石室の全長は右側壁で11.5mを測る。以下は3次調査の結果である。

石室内には約50cmの埋土が堆積し、敷石は大部分が抜かれ、床面下まで大きな攪乱を受けていた。玄室が特にひどく、埋土中には古墳時代から近代までの遺物が出土した。

玄室 奥壁幅2.45m、前幅2.45m、左壁長3.55m、右壁長3.60mを測り、平面長方形を呈す。各壁1枚の花崗岩を面取した巨石を内傾気味に立て、天井石1枚を構築する。上部は天井石との間隙に割石を積み頂部を平坦にそろえる。床面は扁平な割石を敷き詰めていたと考えられるが、埋土中に散乱していたため不明である。現存する敷石から天井までの高さは3.1mを測る。

玄門部では柱状の塊石を立てて袖部とし、前室幅より僅かに内側へ突出させる。幅1.2mを測り、床には仕切石を設置する。天井は巨石を使用し、玄室側に75cmほど張り出す。高さ1.65mを測る。前室 変形両袖構造をとる。左壁は玄門部袖石から1枚の花崗岩を据えて壁となし、次に厚さ70cmの巨石を張り出して据えて袖石とする。羨道部の側壁はこの延長上に連結する。これに対し右壁は玄門部袖石から巨石を連結させて立て、羨道の側壁はその面の延長上に連結する。袖石はこの巨石のとは独立した約45cm×40cmの角柱状に加工した石材を側壁に接して立てることによって構築する。この袖石上面には天井石が密着しており、二次的な造作とは考えにくく、当初からの構造であろう。側壁は右壁は天井まで続く1枚石で、左壁はさらに1段の塊石を積む。天井までの高さは中央部で1.9mである。床は扁平な塊石を敷き約1/2が原状を保つ。左袖石中央部と右袖石を結び位置には、方柱状の石材が仕切石として据えられる。

羨道、前提部 奥幅1.4m、前幅2.8mを測り、ラッパ状に開く平面形態を呈す。壁体は室部より小ぶりの礫を2、3段積む。右壁端の石材は倒れ込んだ状態で原位置とはやや異なると考えられる。天井石は羨道壁第1石目中央付近まで、高さは前室と同じである。床面には敷石が存在した痕跡はない。閉塞施設(Fig.22) 前室袖石と羨道基部との間に、敷居石の外側に扁平な礫を積み上げる。現況では3段目までの石積みまでしか残存していない。

出土遺物(Fig.23~28)

出土状況 石室内は攪乱が大きく、埋土からは近代までの遺物が出土する。前室は敷石が残存していたこともあり、その直上、間隙から古墳時代遺物を多く出土したが原位置を保つものではない。羨

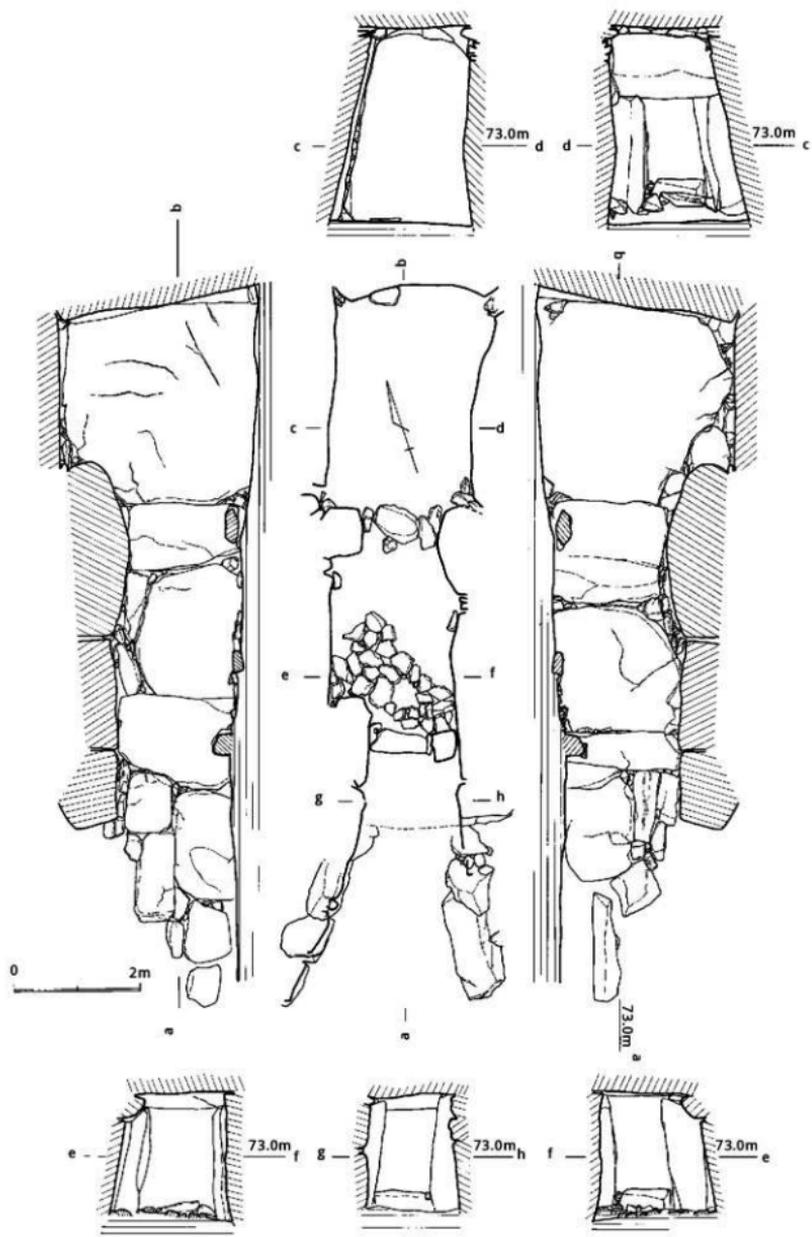


Fig.21 2号墳石室実測図(1/80)

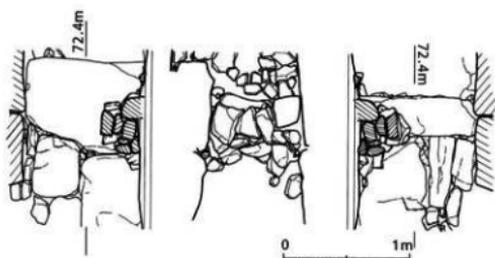


Fig.22 2号墳閉塞状況 1/80)

道前半部からは鉄製品等を出土したが掻き出されたものと考えられる。Fig.23の出土位置は平面図、写真に実物を照らして復元したものである。図の左に土器、右に鉄器の番号を示す。

以下土器の1から18、金属器の1から72は既報告でその時の順序で掲載している。また、土器類のうち古代以降のものについては省略した。他に中世から近代の土器、陶磁器、銅銭、鉄製品等が出土している。

土器(Fig.24、25) 1から18は須恵器である。1から5は蓋、6から8は坏身、9から13は高坏である。10、11は3方に透かしが付く。14は壺の口縁部。15は甕で体部に押列点文を施す。16、17は長頸壺で口縁部を欠く。18は大形の提瓶で体部外面は放射状の叩きと掻き目で調整する。19から26は今回追加報告する須恵器である。19から21は甕の頸部、口縁部である。この他にも胴部片がある。22は坏蓋。23は高坏の脚、24、25は壺の口縁部である。26は壺の体部で最大径部に板状工具の木口で施文する。

金属製品(Fig.26-28) 1から77は前回報告分、78から88は今回追加報告する資料である。1から24は鉄鏃として報告している。5、6は刀子の可能性ある。9、10、13、14は筥被が突出している。6から15には横巻きの木皮が見られる。25は直刀の破片である。26から28は刀装金具である。26は金銅製の鞘巻金具、27は銀張りの飾り金具で把に装着したものであろう。28は真金具である。29は直刀で木質を径0.1cmの銀線をコイル状に巻いている。30は筥、31は鍛造鉄斧である。32から40は釘と報告され、断面は方形を呈し、頭部が残るものは直角に屈曲する。38は鏃の基部で37、39も鏃の可能性ある。32、38、40には木質が残存する。41は鏃の基部、42、43は弓金具で42は両端が丸く、その間に木質が残る。44はコの字状に屈曲し用途不明。45から54は帯金具でコハゼ形、方形、長方形のものがある。55、56、58は壺鍔吊金具である。57は絞具の尾錠である。59は用途不明。60は罎子である。61は用途不明。62から65、67から70は鉸具である。64、65、69は同一個体とは限らないが、復元的に示した。70には尾錠が付く。66は壺鍔金具である。71、72は円形の座金具が付く鞍金具である。73は銅芯銀張りの耳環で破損が著しい。74から77は銅釘で羨道前半の出土成分に砒素を含む。

78から88は今回追加報告分である。78から81は鏃で78、80は透かしを持ち、79は開部を持つ。82

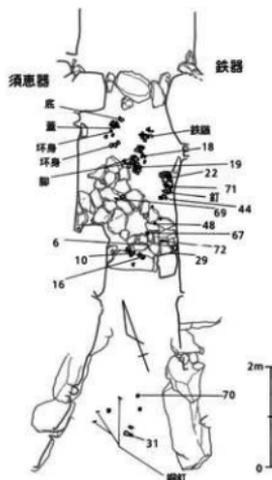


Fig.23 2号墳遺物出土状況 1/100)

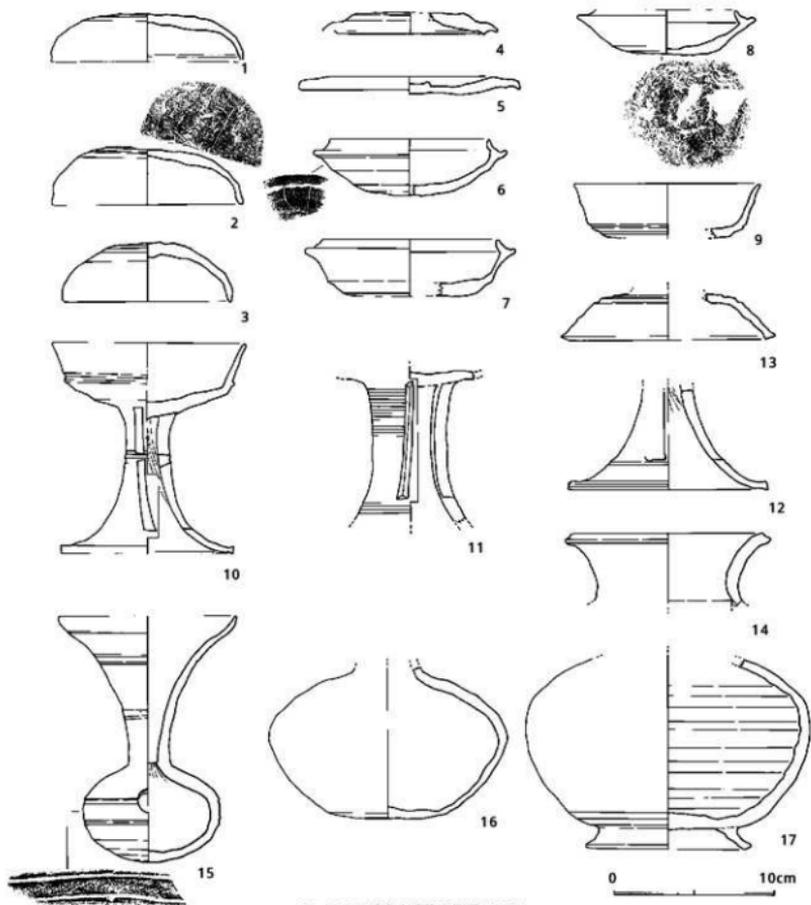


Fig.24 2号墳出土遺物実測図1(1/3)

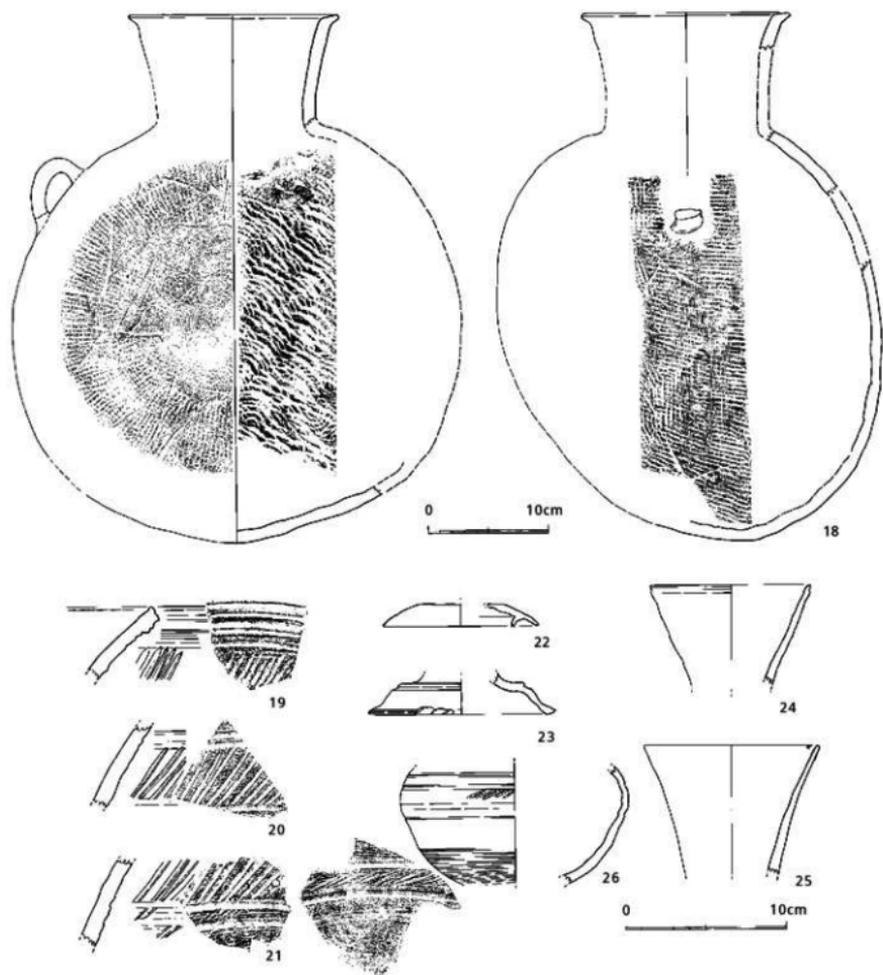


Fig.25 2号墳出土遺物実測図(1/3, 1/4)

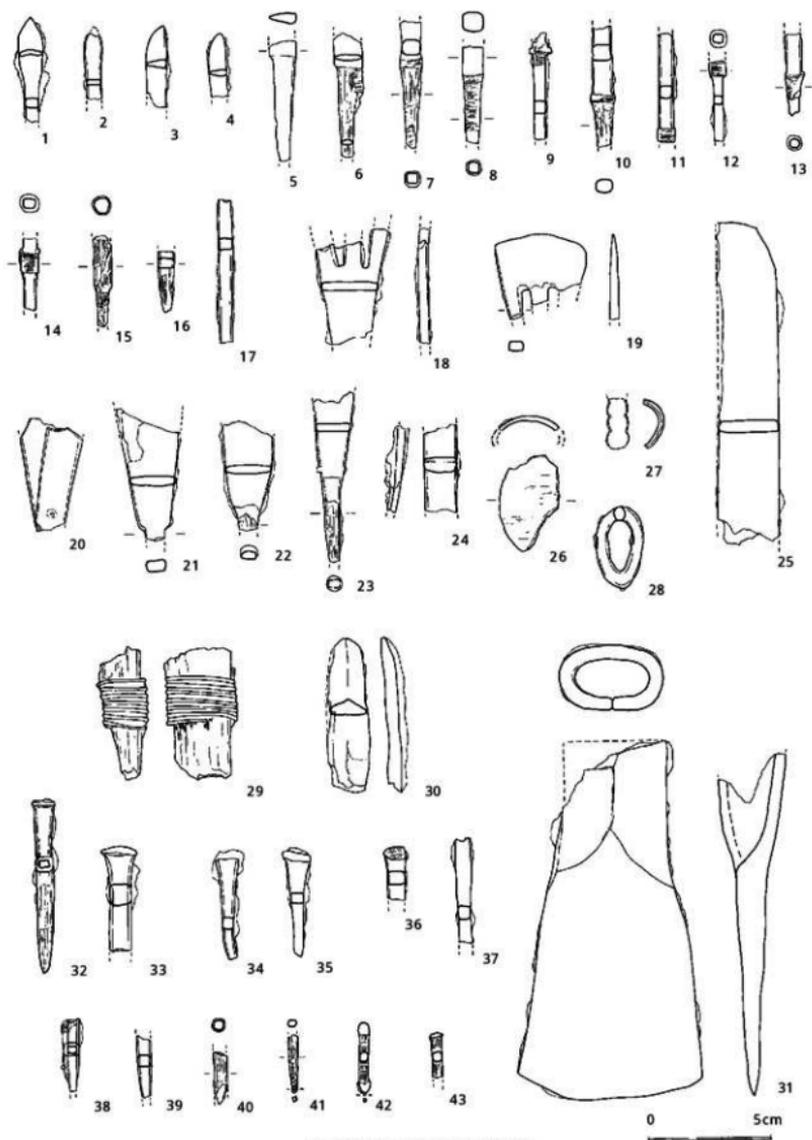


Fig.26 2号墳出土遺物実測図(1/2)

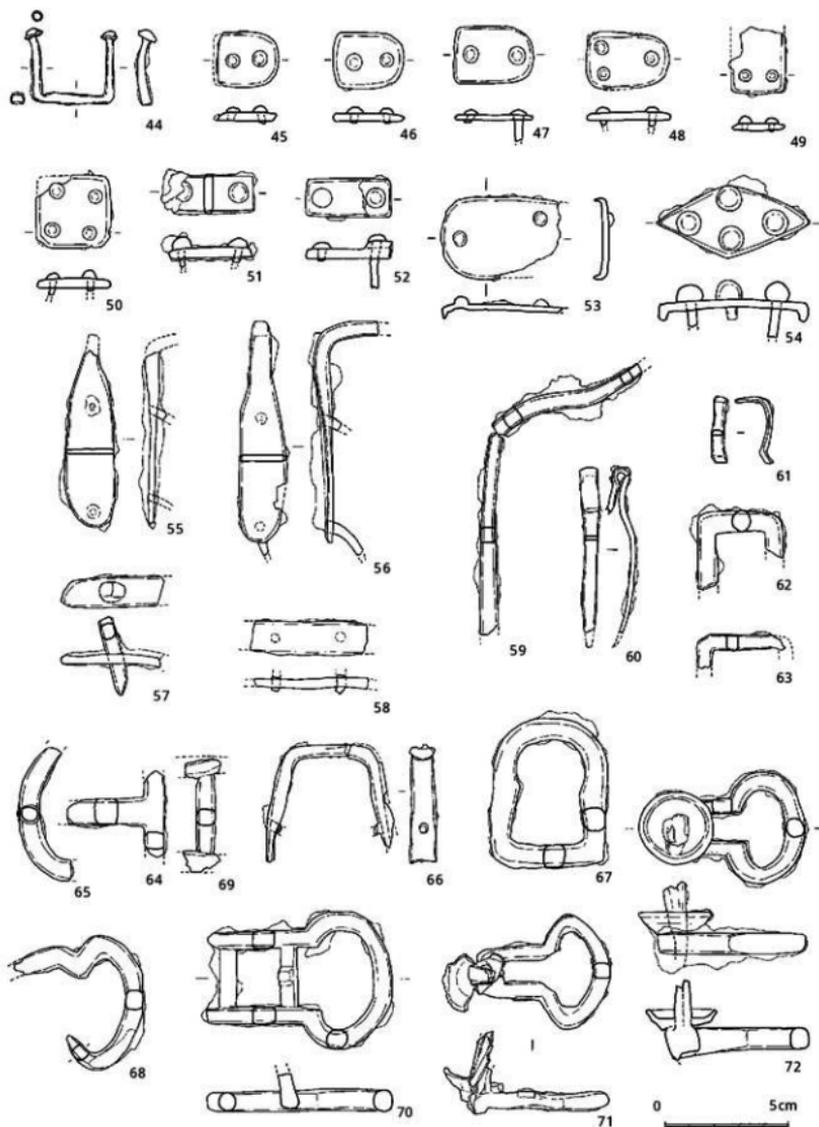


Fig.27 2号墳出土遺物実測図(1/2)

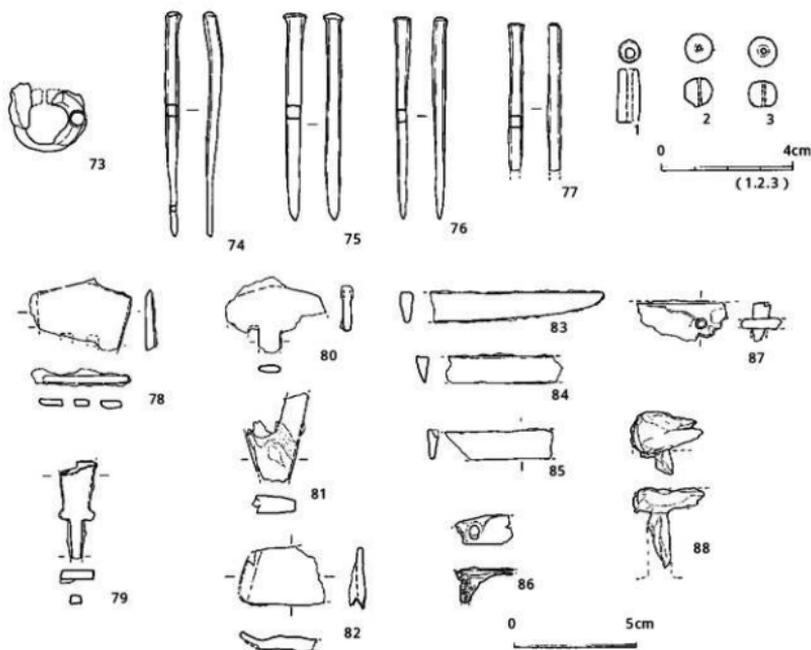


Fig.28 2号墳出土遺物実測図(1/2,2/3)

は鎌である。83から85は刀子と考えられる。86は板に紙、87は板に棒状材の組み合わせで不明品。88は鉸具の組合部材片であろう。

玉類(Fig.28) 1から3はめのう製の管玉で1は藍色を、2、3は橙色を呈す。

V. その他の遺構と遺物

1. 土壌墓

1号墳と2号墳の周溝に挟まれた位置に4基の土坑を検出した。縦長の類似した形態で2基づつが並ぶ。その形態と副葬または供献と考えられる土器から土坑墓と考えられる。また、1号墳の東に位置するSK031は形態を異にするが埋葬施設と考えられ、ここで取り上げる。

SK009(Fig.29,30) 平面は楕円に近い長方形で280×70cmを測り、深さ58cmと急に立ち上がる。中央部の床面およびやや浮いた位置に横瓶1個体がつぶれた状態で出土した。淡橙色、淡黄橙色のや

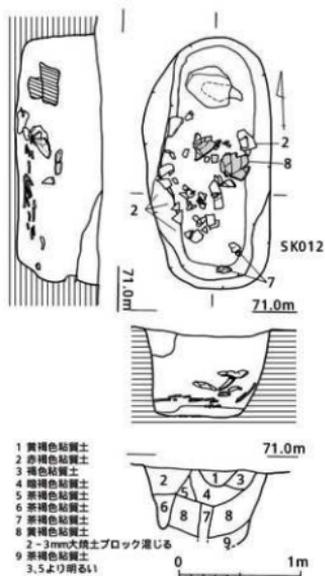
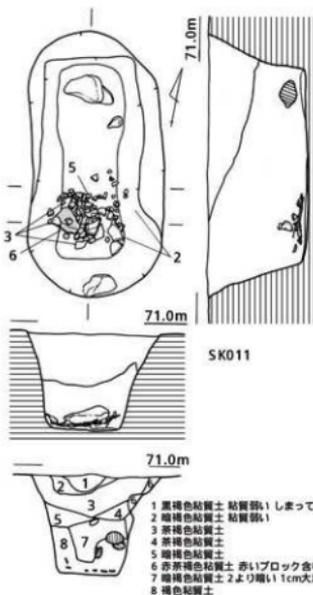
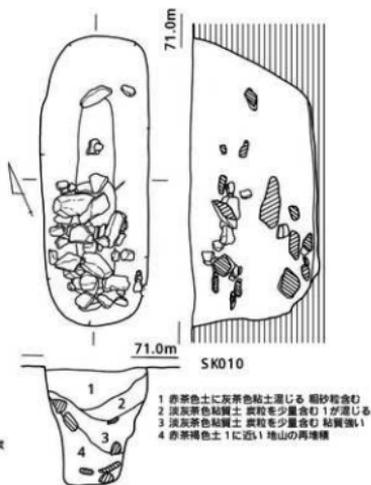
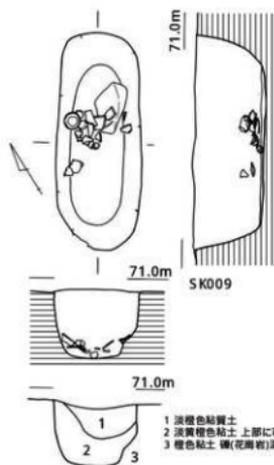


Fig.29 土壌実測図(1/40)

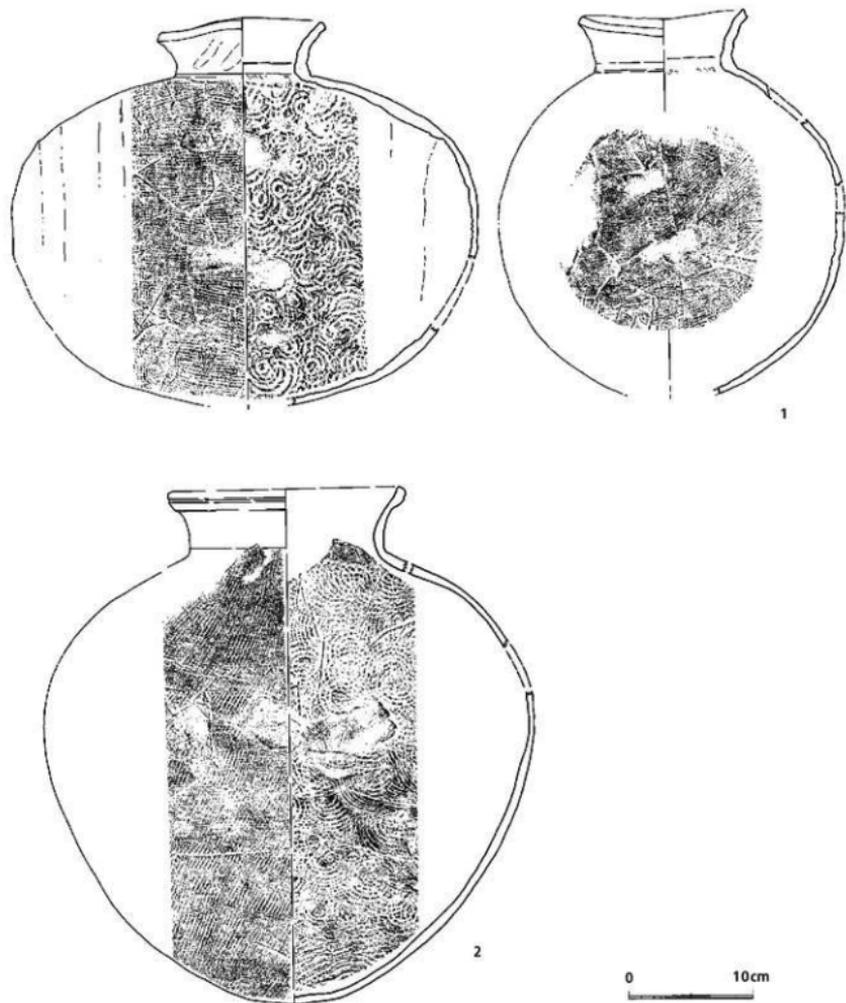


Fig.30 土墳墓出土遺物1(1/4)

や粘質土を覆土とし、中位に若干の炭粒を含む。

出土遺物 1は横瓶で体部は俵形を呈す。体部は細かく割れ片側1/2を欠く。外面は疑似格子目叩き、内面には同心円状の当て具痕がはっきり残る。口縁部は回転で調整を施す。

SK010(Fig.29) SK009から東2.5mの位置に並ぶ。平面は楕円に近い長方形で240×90cm、深さ

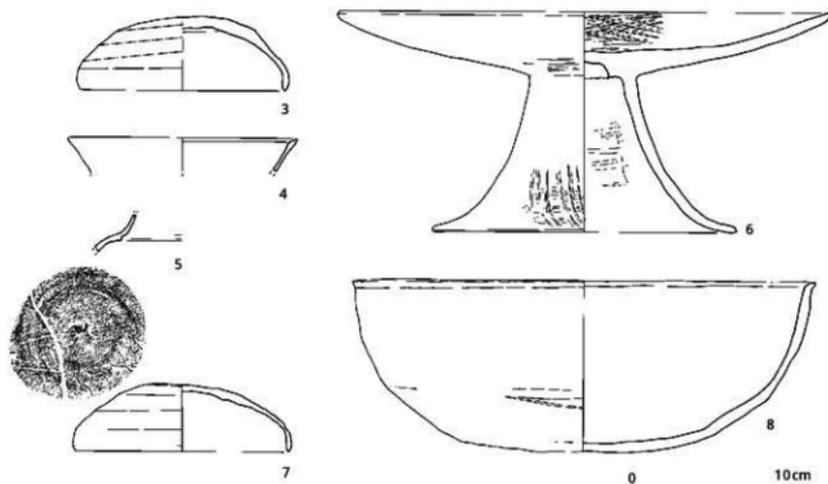


Fig.31 土壇墓出土遺物2(1/3)

108cmを測る。床は幅32cmと狭い。南半には30、40cmまでの礫が上下2面をなして出土した。覆土は灰茶、赤茶色の粘質土で中に炭粒を含む。遺物は出土していない。

SK011(Fig.29～31) SK009、010の北東3.5mに位置する。平面楕円形に近い長方形で240×110cm、深さ82cmを測る。床面からは南半の西側を中心に土師器の高坏6が、東側から須恵器の甕2が割れた状態で出土した。北端には30cm大の礫があった。覆土は茶色から暗茶褐色の粘質土である。

出土遺物 3は須恵器の坏蓋で3/4強が南半に散らばる。焼きが甘く淡灰色を呈す。4、5は甕の口縁部頸部の小片。6は土師器の高坏で坏部が口縁部の1/4強、脚部の1/2弱ほどが破片で重なる。外面、坏部内面に赤色顔料を施し橙色を呈す。坏部は内外とも研磨調整、脚部は外面研磨、内面刷毛目調整を施す。器面は荒れている。2は口縁部の一部と胴上部の一部が出土したが主体はSK012からである。SK012(Fig.29～31) SK011の東1mの位置に並ぶ。平面は楕円に近い楕円形で210×114cm、深さ70cmを測る。南西側の床面より10cmほど浮いた位置から須恵器の甕2が、中央の床面から20cmから40cmで土師器の鉢8が割れた状態で出土した。

出土遺物 2は口縁部の1/4強、胴部の8割ほどが残る。そのうちSK012から胴部の8割ほどが出土した。口縁部は回転などで調整で浅く細い沈線が巡る。胴部は外面疑似格子叩き、内面同心円状で具痕が残る。7は須恵器の坏蓋で焼きが甘く淡灰色を呈す。全体の7割、口縁部の1/4が残る。8は土師器の鉢で一部を除いて完形に復元できた。器面は荒れ気味で、上半はなで調整、下部は横方向の擦痕が見られる。橙色から茶色を呈す。

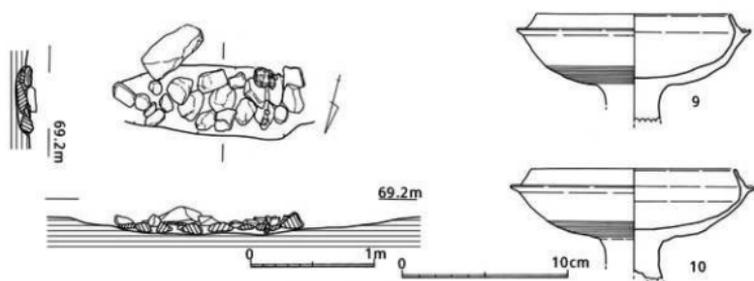


Fig.32 SK031実測図、出土遺物実測図(1/40、1/3)

SK031(Fig.32)1号墳の南東に位置する。10から20cm大の礫を150×50cmの範囲に敷き、南西端に高環の環部2個体が、1つは正置、もう一方はそれに被せたものがずれた状態で出土した(Ph.31)。堀込みはあったと考えられるが若干のくぼみの床面のみが残存である。平面的には広がらないと考えられる。

出土遺物9、10は須恵器の高環であるいずれも脚部を欠く。10が正置されていたことを考えると当初から打ち欠いて埋置したと考えられる。環部外面下部には掻き目を施し、胎土に細砂粒を多く含む。9は内面のなでは中央の一部のみで内面淡茶色、外面青灰色を呈す。10は内面底の全面をなで、内外灰褐色を呈す。

2. 土坑

古墳の周囲で土坑、焼土坑を検出した。ここで取り上げた以外にも土質、色の違いから掘削したものがあるが、人為的なものではないと判断した。

SK018 1号墳の主体部の北側で検出した。平面長方形を呈し、崩れた部分を除くと平面は130×80cm、深さ68cmを測る。覆土は淡黄褐色の粘質土で古墳の墳丘以前のものと考えられる。乙石遺跡2次調査18-1区で落とし穴とした遺構に近い。覆土中上部より縄文土器と考えられる小片が出土した。

SK017 1号墳の墓道の西側で検出した土坑で平面、長楕円形を呈し、184×65cm、深さ48cmを測る。覆土は黄褐色粘質土で混じりが少ない。古墳以前の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

SK028 1号墳の周溝SD004の南端部で検出した土坑で、SD004に切られる。平面楕円形で226×128cmを測り、断面すり鉢状で深さ60cmを測る。覆土は淡黄褐色粘質土で中位から同一個体の土師器の裏の小片が出土した。

SK013 1号墳の墓道の西で検出した焼土坑で、平面長方形を呈し95×70cm、深さ15cmを測る。東側の壁が一部赤変する。床に炭粒層が薄く残る。遺物は出土していない。

SK029 2号墳の周溝SD001と重なる焼土坑でSD001に覆土がないため切り合いは解らなかった。平面長方形を呈し、94×52cm、深さ23cmを測る。側壁が所々赤変する。床面に薄く炭粒が溜まる。遺物は出土していない。

SK030 1号墳の東側で検出した焼土坑で、平面楕円形を呈す。90×60cmを測り、側面が焼成で赤変する。側壁は掘りすぎている。覆土下半には炭粒が溜まる。遺物は出土していない。

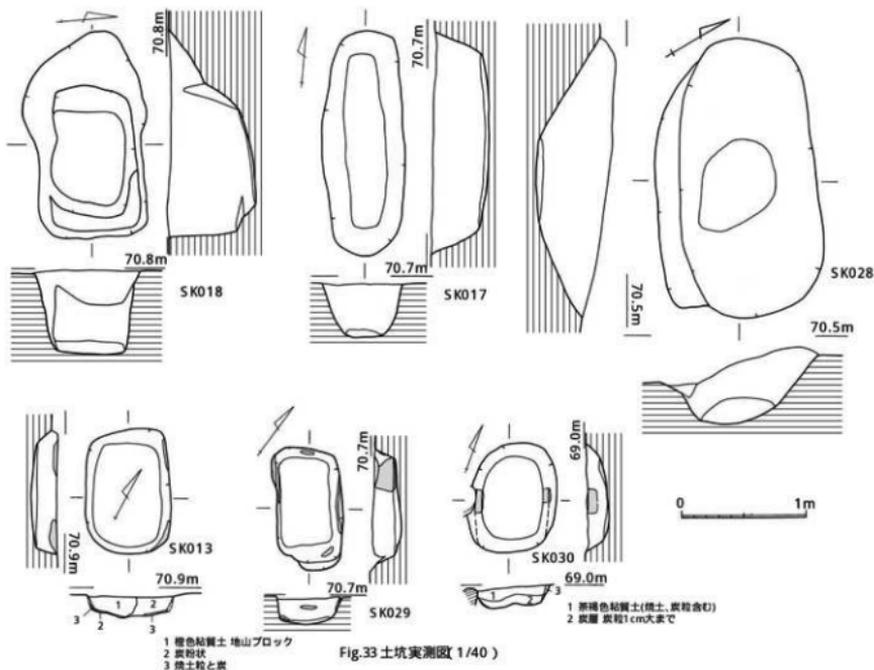


Fig.33 土坑実測図(1/40)

3. 住居跡

SC025 1号墳墓道の西側に位置し、墓道に切られ一部が残存し、隅丸方形プランになると考えられる。現存南北長5.2mを測り、5.6mほどはあったと考えられる。深さ約40cmが残る。西壁中央やや北寄りにカマドを持つ。カマドは幅55cm、長さ120cmを掘込み、残存する中央部に径10cmほどの柱状の礎を立てる。その前面床および側面は焼成により赤変する。カマドを切るビットを3つ検出したが、周辺に同様の遺構がないことを考えると住居に伴う可能性がある。主柱穴は検出していない。出土遺物 11から13はカマドの立石上と前を中心に出土した土師器の裏で同一個体と考えられる。図示した以外に破片があるが形をなさない。口縁部11の外面には横方向の擦痕がみられ、胴部13の外面には目の広い刷毛目調整が見られる他は器面が荒れている。内面はいずれも削り調整である。出土した遺物は以上である。

4. 溝他

SD014 調査区南端の落ちで、急斜面へつながる。SD004の周辺以外は3本のトレンチの掘削を行った。須恵器片を中心に近代までの遺物が出土した。

SD015 SD005から東へ直線的に延びる溝で幅70cm、深さ30cmを測る。壁は直に立つ。覆土はやや粘質で砂を多く含む暗茶褐色土で土色はSD005に近い。土師器の小片が1片出土している。

SD019 SD004北端の東側に接して径1.4mほどの円形の掘込みの中央に巨石が埋まる。覆土に

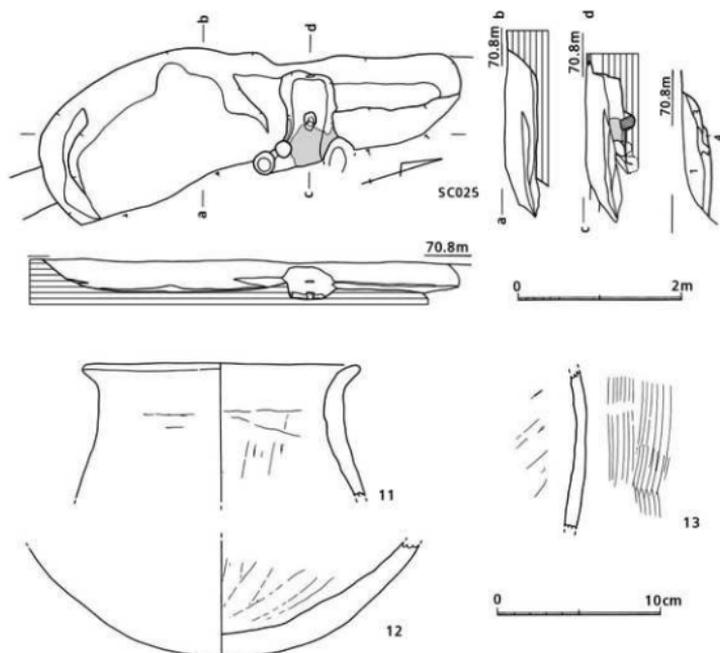


Fig.34 住居跡実測図、出土遺物実測図(1/60、1/3)

水田耕作土を多く含んでおり、耕作に邪魔な礫を埋めたものと考えられる。周囲に同様の堀込みSX033、034、035がある。

5. 2区の調査

道路北側の2区(Fig.3)では1号墳の周溝SD034を検出した他に焼土坑1基と溝を検出した。他に遺構状の堀方がいくつか見られるが、立ち上がりがはっきりせず人為的なものではないと考えられる。溝SD101は幅80cm、深さ10cmを測り、茶褐色砂質土を覆土とする。遺物は出土していない。焼土坑SK102は遺構図を紛失し詳細は不明である。平面隅丸長方形を呈し約180×130cmの規模である。側壁は被熱赤変している。遺物は出土していない。

6. その他の遺物

ここでは遺構から遊離した遺物を報告する(Fig.35)。1は球形の土製品で表採品である。表面はなで調整で平滑。胎土に砂粒を多く含み黄茶色を呈す。295gを量る。2は玄武岩製の石斧で2号墳前庭部から出土した。刃部側を欠損し、810gを量る。器面全体を磨いているが敲打痕が残る。石斧は1号墳周溝から剥離片が出土している。3から5は石鏃で3が安山岩、4、5は黒曜石製である。順に0.64、0.52、0.52gを量る。3は自然面を残し、規則的な剥離で成形する。4は主剥離面を残し、基部と側面にわずかに小さな剥離を施す。

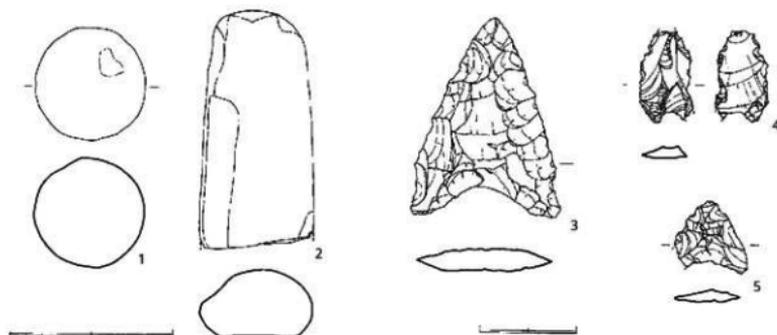


Fig.35 その他の遺物実測図 1/1、1/3)

先端は欠損する。5は小形で両面に粗い成形を施す。2号墳玄室出土。この他、黒曜石、安山岩の薄片が少量出土している。

VI. おわりに

1. 調査の結果

丘陵落ち際に立地する2基の方墳を中心に報告を行った。簡単にその内容を振り返っておきたい。今回の調査は3次調査で確認された金武古墳群乙石H群(夫婦塚古墳)の2回目の調査にあたる。

1号墳 墳丘は明治時代に削平され、3次調査では残存していた石室と墓道の一部を、7次調査では周溝、墓道を含む全体の調査を行った。コの字状に周溝が巡る方墳で墳丘規模は幅21.5×約22mが復元できる。石室は単室構造の横穴式石室で、主軸方位はN26°Wにとり南南西に開口し、全長10.55mを測る。奥、側壁は天井までの巨石を用いたと考えられるが破壊を受けていた。羨道部には敷石が見られるが玄室部は荒らされ痕跡を残していない。羨道から直線的に延びる墓道は南側斜面に至る37mを確認した。墓道の両側には周溝から続く溝が並行する。羨道部端から東側には列石を確認した。遺物は羨道部を中心に須恵器、土師器、鉄器、銅製耳管、五鈴鏡が出土し、鉄器では釘、馬具、留金具、棺金具等が特筆される。また、周溝から新羅土器の小片が、玄室、羨道からは供献されたと考えられる精錬滓が出土している。

2号墳 現在も墳丘が比較的良好に残り2段築造が確認できる。3次調査では石室を、7次調査では東、北側の周溝を調査した。コの字状に周溝が巡ると考えられ、墳丘規模は35×32mほどが復元できる。石室は複室の横穴式石室で保存状態がよい。主軸方位はN17°Eで南南西に開口し、全長11.5mを測る。奥、側壁は天井まで1枚の巨石を用い、玄室高3.15m、前室高1.9mを測る。墓道は未調査だが、羨道端より3mほどで急斜面となる。遺物は前室、羨道部から須恵器、土師器、鉄器、耳環、玉類等が出土し、鉄器では釘、帯金具、馬具等が特筆される。

前回の報告において、1号墳はFig.13の須恵器の坏が九州編年Ⅳb期に、2号墳Fig.24の1、2、6、7がⅣa期に属すると考えられ、1号墳が6世紀末～7世紀初頭、2号墳が6世紀後半～末葉の築造という年代が与えられている。そして造営期間をやはり出土須恵器から1号墳が7世紀末葉まで、2号墳が8世紀に入る時期までの存続と推測している。築造時期については2号墳がわずかに先行する位の差と考えられる。

その他の遺構 埋葬施設としてはSK009から012が土墳墓、SK031が石敷きの土墳墓と考えられる。時期は夫婦塚古墳とほぼ同じで関連があるものであろう。このほか1号墳の墓道に切られる6世紀代の竪穴式住居1棟、時期不明の焼土坑4基を検出した。

2. 1. 2号墳の位置づけ

これまで報告の中で特筆されることとして1、2号墳が方墳で22m、35mという墳丘規模を持つ巨石墳であること、馬具、棺金具といった鉄器が出土していることがあげられる。

古墳群内 H群は造営年代の近接した2基で構成され、周囲に先行する古墳は存在しない。西に隣接していたとされるC群3基は、小規模で直接関連するとは考え難く、H群は単独かつ新たな墓域として獲得されたと考えられている(柳沢1981)。その規模と内容は群集墳の中だけで位置づけられず、首長墓として想定しうるものである。

方墳 早良平野で確認されている方墳は夫婦塚古墳の他に4基と少ない。このうち草場古墳群5号墳は墳丘規模7.2m×7.5m+aで竪穴式石室を主体部としⅢb期に位置付けられる。他に未報告の1号墳がある。高崎古墳群2号墳は一边15mでⅢbから、Ⅳ期の須恵器と馬具、太刀、金銅張環頭などの鉄器が多く出土しているが群集墳の中の一基である。金武古墳群5群2号墳は周溝のみの残存で、一部が調査され一边17mを測るが、円筒埴輪から5世紀前葉のものである。このほかにも未確認のものもあると考えられるが、夫婦塚古墳が方墳としても時期、規模とも平野内では突出した存在である。首長墓 この時期の大形墳は前方後円墳の系譜上でとらえられることが多い。早良平野では少なくとも6基の前方後円墳が確認されているが、その内最も新しいものは6世紀前葉に位置づけることのできる羽根戸南古墳群F-2号墳である。F-2号墳は墳長16mを測る小形の前方後円墳であり、時期的にも、また規模の上でも夫婦塚古墳(H-1・2号墳)に直接系譜をたどることができるかは疑問視される。

その他、夫婦塚古墳に関連する主要クラスの墳墓としては、浦江古墳群第1号墳の存在を挙げることができる。浦江1号墳は径23～25mを測る大形の円墳であり、主体部である横穴式石室には彩色壁画が描かれている。この古墳は墳丘規模もさることながら、金銅製馬具、裝飾付須恵器など優れた副葬品を持ち、首長墓として遜色の無い内容を有している。出土遺物より、この古墳は6世紀後半に位置づけることができ、当地域における首長墓は、浦江1号墳→H-1号墳→H-2号墳という変遷を考えることができるだろう。

3. 新羅土器

7次調査において1号墳周溝から新羅土器の長頸壺片(Fig.6-7、Fig.36-1)が出土した。

以下これまで早良平野内で出土した新羅土器をあげておく。

金武古墳群 4次吉武L群 1号墳周溝 台付き壺、8号墳周溝 高坏、印花紋蓋

6次吉武G群 号墳周溝印花紋壺(Fig.36-4)

城田遺跡2次 9区 印花紋壺小片(Fig.36-2) 5、12区 印花紋壺(未報告)

浦江古墳群 1号墳 周溝 印花紋坏小片(Fig.36-3)

山崎古墳群2次 C群1号墳 蓋

三郎丸古墳群1次 B群3号墳 印花紋長頸壺(Fig.36-5)

松木田遺跡3次 古代包含層 甕(Fig.36-6) 口縁部両面に黒色顔料

参考文献

- 柳沢一男1981「V 金武古墳群の構成」『重要遺跡確認調査報告Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告第68集
- 下原幸裕「後・終末期古墳の検討」『古文化談叢』
- 白井克也1999「大野城市出土新羅土器の再検討」『福岡考古第18号』
- 白井克也2002「福岡市・金武古墳群吉武L群出土の新羅土器の再検討」『福岡考古第20号』
- 『草場古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第301集 1992
- 『高崎古墳群』『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第1集』1970 福岡県教育委員会
- 『三郎丸古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第495集 1996
- 『金武2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第866集 2005：城田遺跡2次9区
- 『山崎古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第380集 1994
- 『浦江古墳群1号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第862集 2005
- 『松木田遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第578集 1998

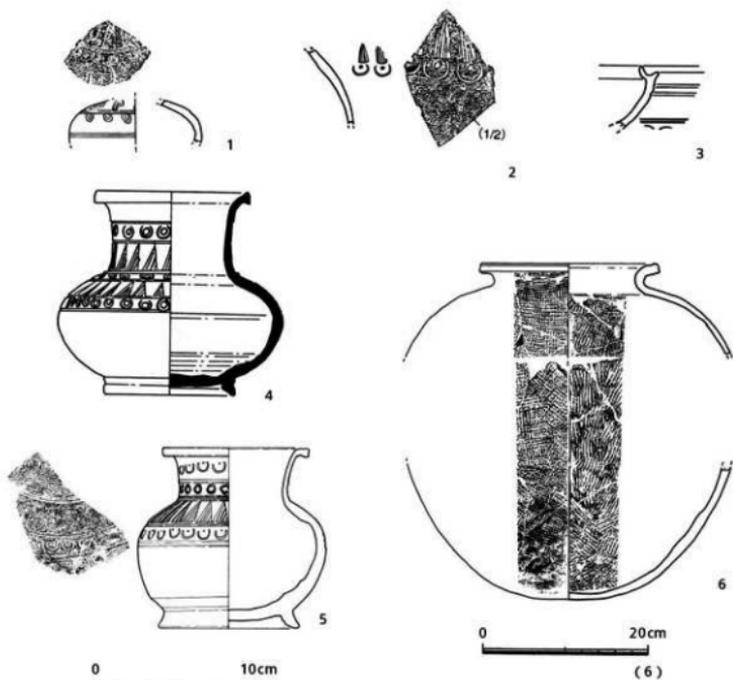


Fig.36 早良平野出土の新羅系土器 1/3、1/4)

出土金属器一覧表 1

1号墳

報告書Fig	出土遺構	資料名	備考	遺物No.
16-1	玄室	耳環(青銅芯? 金薄板巻中細環)	表面では金と若干の銀を検出、表面の僅かな破れから分析した新からは銅と鉛、錫、アンチモンを検出 = 青銅芯か。	1054
16-2		刀子?		1055
16-3		刀子?	実測図と大きく異なっており中央部が剝離、欠失、刃の状況が不明。	1056
16-4		刀子	1062と接合	
16-5		鉄鍔(長頸鍔頭～麗被部)		1058
16-6		鉄鍔?		1059
16-7		鉄鍔(長頸鍔頭～麗被部)		1060
16-8		鉄鍔(茎部)		1061
16-9		刀子	Fig16-9に別部材が接合し更に10057が接合	1062
16-10		鉄鍔(長頸鍔頭部?)		1063
16-11		鉄鍔(茎部)		1064
16-12		鉄鍔(茎部)		1065
16-13		鉄鍔(茎部)		1066
16-14		刀子		1067
16-15		鉄刀(切っ先部分)		1068
16-16		鉄鎌?		1069
16-17		不明刃物?		1070
16-18	羨道	鉄刀(刀身片)		1071
16-19		鉄刀(刀身片)		1072
16-20		鉄鎌		1073
16-21		鉄鎌		1074
16-22		不明鉄器	铸造品と思われる腐蝕状況。	1075
16-23		馬具(鉄地金銅張? 心葉形杏葉)	1カ所残存する紙頭と裏面に緑青の痕跡。 他金銅の痕跡は見られないが磨りの突起部分の分析で銅を検出、紙頭の分析では銅と金を検出。	1076
16-24		馬具(鉄地金銅張? 心葉形杏葉)	金銅を積極的に示す痕跡は見られない。	1077
16-25		馬具(山形帯金具)	分析では地、紙、貴金いずれも鉄のみ。	1078
16-26		鉄釘	木質塊残存。	1079
16-27		鉄釘		1080
16-28		鉄釘	頭部の破損した部分で緑青が浮いている。 分析でも鉄と銅を検出。	1081
16-29		鉄釘		1082
16-30		鉄釘		1083
16-31		鉄釘		1084
16-32		鉄釘		1085
16-33		鉄釘		1086
16-34		鉄釘		1087
16-35		鉄釘		1088
16-36		鉄釘		1089
16-37		鉄釘		1090
16-38		鉄釘		1091
16-39		鉄釘		1092
16-40		鉄釘		1093
16-41		鉄釘		1094
16-42		鉄釘		1095
16-43		鉄釘	頭部欠失。木質塊残存。	1096
16-44		鉄釘	頭部欠失。	1097
17-45		不明両頭棒状製品	用途不明。	1098
17-46		弓金具		1099
17-47		馬具(コハセ形帯金具)		1100
17-48		馬具(コハセ形帯金具)	地板の分析では鉄のみ、紙頭からは銀を検出。	1101
17-49		棺座金具(環部分)		1102
17-50		棺座金具(環部分)		1103
17-51		棺座金具(環部分)		1104
17-52		棺座金具		1108
17-53		棺座金具		1106
17-54		棺座金具		1107

出土金属器一覧表 2

報告書Fig	出土遺構	資料名	備考	遺物No.
17-55		棺座金具		1105
17-56	羨道	鉄鏃(圭頭刃部片)		1171
17-57		鉄鏃(圭頭刃部)		1156
17-58	前室攪乱土	馬具(方形帯金具)		1174
17-59		馬具(コハセ形帯金具)		1153
17-60		馬具(コハセ形帯金具)		1177
17-61	羨道	馬具(鉸具)	鍔用か。	1168
18	羨道	五鈴鏡		1109
		鉄釘	頭部の形状からは中世か?。共存していた馬具(壺鍔金具)は02098に接合。02092に接合する錷子片も含まれていた。	1151
		不明板状鉄器		1152
		不明板状鉄器	屈曲部有り。	1154
		鉄銭		1155
		鉄刀(刀身片)		1157
		不明鉄片		1158
		不明鉄片一括		1159
		鉄塊		1160
		鉄鏃片一括		1161
		鉄鏃片一括		1162
		鉄鏃片一括		1163
		不明鉄片一括		1164
		不明銅製品		1165
		鉄塊		1169
	羨道	鉄鏃(頸、茎部片)		1170
	前室床面上	鉄滓		1172
	前室攪乱土	鉄銭		1173
	前室攪乱土	鉄鏃(頸、茎部片)		1175
	前室攪乱土	不明鉄片		1176

2号墳

報告書Fig	出土遺構	資料名	備考	遺物No.
26-1		鉄鏃(長頸柳葉? 刃部)		2033
26-2		鉄鏃		2034
26-3		鉄鏃(長頸片刃)or 刀子?		2035
26-4		鉄鏃(長頸片刃? 刃部)		2036
26-5		刀子(刃部)		2037
26-6		刀子(茎部)		2038
26-7		鉄鏃(麗被 - 茎部)		2039
26-8		鉄鏃(麗被 - 茎部)		2040
26-9		鉄鏃(麗被 - 茎部)		2041
26-10		鉄鏃(長頸鏃頭 - 茎部)		2042
26-11		鉄鏃(長頸鏃頭 - 麗被)		2043
26-12		鉄鏃(茎部)		2044
26-13		鉄鏃(長頸鏃頭 - 茎部)		2045
26-14		鉄鏃(麗被 - 茎部)		2046
26-15		鉄鏃(茎部)		2047
26-16		刀子or 鉄鏃(茎部)		2048
26-17		鉄鏃(長頸鏃頭部)		2049
26-18	前室	鉄鏃(有透方頭)		2050
26-19	前室	鉄鏃(有透方頭)		2051
26-20		不明鉄器	銚を使った構造部分を有する。	2052
26-21		鉄鏃(圭頭or方頭)		2053
26-22	前室	鉄鏃(圭頭or方頭)		2054
26-23		鉄鏃(圭頭or方頭)		2055
26-24		馬具(壺鍔金具)?		2056
26-25	前室	鉄刀(刃部)		2057
26-26		刀装具		2058
26-27		刀装具(鍔張り)	分析により鍔を検出。	2059
26-28		刀装具(鍔金具)		2060

出土金属器一覧表 3

報告書Fig	出土遺構	資料名	備考	遺物No.
26-29		鉄刀(柄部銀線巻き)	線巻き部分の分析で銀を検出。	2061
26-30		ヤリガンナ		2062
26-31	前提部	袋状鉄片		2063
26-32		鉄釘	実測図と大幅に変わっている。	2064
26-33		鉄釘		2065
26-34		鉄釘	太さや頭部の形状からは中世的? (明確な参照なし)。	2066
26-35		鉄釘		2067
26-36		鉄釘		2068
26-37		鉄釘or鉄鏃類部		2069
26-38		鉄鏃(茎部)	糸巻き有り。	2070
26-39		鉄釘or鉄鏃茎?		2071
26-40		鉄釘		2072
26-41		鉄鏃(茎部)	糸巻き有り。	2073
26-42		弓金具		2074
26-43		弓金具?	消極的判断。	2075
27-44	前室	不明留金具	2195より破片接合。完形となる	2076
27-45		馬具(コハゼ形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2077
27-46		馬具(コハゼ形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2078
27-47		馬具(コハゼ形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2079
27-48	前室	馬具(コハゼ形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2080
27-49		馬具(方形帯金具)		2081
27-50		馬具(方形帯金具)	鉄頭は分析により銀を検出。	2082
27-51		馬具(長方形帯金具)		2083
27-52		馬具(長方形帯金具)	鉄頭の分析を行ったが加飾痕を示す明確な元素の検出は確認できない。	2084
27-53		馬具(大型コハゼ形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2085
27-54		馬具(菱形帯金具)	鉄頭は色調より銀張りと考えられる。	2086
27-55		馬具(壺鍔吊金具)		2087
27-56		馬具(壺鍔吊金具)		2088
27-57		馬具(鉸具片?)		2089
27-58		馬具(壺鍔吊金具)		2090
27-59		不明棒状製品		2091
27-60		鍔子	01151からの破片が接合。	2092
27-61		不明鉄器	刀装具?あるいは馬具の曹金具か。	2093
27-62		馬具(鉸具片)		2094
27-63		馬具(鉸具片)?or不明鉄器	腐蝕で表面が剥落し本来の形状が分かり難い。	2095
27-64		馬具(鉸具片)	02097-02101と同一個体の可能性。鍔用。	2096
27-65		馬具(鉸具片)	02096-02101と同一個体の可能性。鍔用。	2097
27-66		馬具(壺鍔吊金具)	01151に含まれていた破片と接合。	2098
27-67	前室	馬具(鉸具)	頭釦用?	2099
27-68		馬具(鉸具)	頭釦用?	2100
27-69	前室	馬具(鉸具片)	02096-02097と同一個体の可能性。鍔用。	2101
27-70	前提部	馬具(鉸具)	鍔用。	2102
27-71	前室	馬具(シオデ)	02187より破片吸収。	2103
27-72	前室	馬具(シオデ)		2104
28-73		耳環(銅芯銀薄板巻鍮金太環)	心材はほぼ銅のみ。表面では金、銀、銅、銀素を検出。水銀も若干含まれると思われる。	2105
28-74	前提部	銅釘	分析の結果銅と僅かにヒ素が検出される。	2109
28-75	前提部	銅釘	分析の結果銅と若干のヒ素が検出される。	2110
28-76	前提部	銅釘	分析の結果銅のみ。ヒ素は検出されない。	2111
28-77	前提部	銅釘	分析の結果銅と僅かにヒ素が検出される。	2112
28-78		鉄鏃(有透方頭片)	02189より抽出。	2242
28-79		鉄鏃(方頭or主頭蓋被部分含む)	02193より抽出。	2247
28-80		鉄鏃(有透方頭片)		2192
28-82		鉄鏃?		2190
28-83		不明板状鉄器	02193より抽出。端部が斜め45°で終わる。	2240
28-84		刀子(刃部片)	02193より抽出。	2244
28-85		刀子(刃部片)	02193より抽出。	2245
28-86		不明鉄器	02189より抽出。一見、02188に形状が類するものの板と板の組み合わせであることや木質が付着する点異なる。	2180

出土金属器一覧表 4

報告書Fig	出土遺構	資料名	備考	遺物No.
28-87		不明鉄器	何らかの部分、棒状の部分と板状の部分からなっている。	2188
28-88		馬具(鉸具)?	部材の組み合わせが確認できる。	2191
	羨道部敷石上面	錠	大型。	2180
	羨道部	不明棒状鉄器	近現代?(根拠なし)。	2181
	墓道部	鉄滓		2182
	墓道攪乱土	不明棒状鉄器	屈曲部有り(鉸具枠?)。	2183
		鉄鍬(圭頭or方頭片)+不明板状品		2184
		不明板状鉄器	層状に剥離、02180の一部か。	2185
		不明鉄片	器物ではない?。	2186
		馬具(大型コハセ形帯金具)	02085の類品。	2187
		馬具(シオデ片)	02103の部材か。	2241
		不明鉄片一括	鉄鍬等含む。一部分離抽出。	2189
		鉄刀(茎部片)	02189より抽出。目釘有り。	2243
		不明板棒状鉄器	刀子片を含む?。一部分離抽出。	2193
		鉄釘一括	細し、中世的(根拠なし)。	2194
		鉄釘一括	頭部円形。古墳時代の(根拠なし)。	2195
		不明金具	02195より抽出。青銅?と鉄を組み合わせた可動式部材。	2248
		馬具(鉸具)?	部材の組み合わせが確認できる。	2196
		馬具?(鉸具等の部材片)		2197
		鉄滓		2198
		鉄鍬片一括		2199
	墓道(羨道口)	鉄製品		2200
	墓道(羨道口)	鉄釘他棒状鉄器	新しい?(根拠なし)。	2201
	羨道部床面	不明キャップ状金属器	新しい?。アルミ?。	2202
29-1		銅銭(寛永通寶)	以下報告書Fig.番号は第52集のもの	2205
29-2		銅銭(寛永通寶)		2206
29-3		銅銭(寛永通寶)		2207
29-4		銅銭(寛永通寶)		2208
29-5		銅銭(寛永通寶)		2209
29-6		銅銭(寛永通寶)		2210
29-7		銅銭(寛永通寶)		2211
29-8		銅銭(寛永通寶)		2212
29-9		銅銭(寛永通寶)		2213
29-10		銅銭(寛永通寶)		2214
29-11		銅銭(寛永通寶)		2215
29-12		銅銭(寛永通寶)		2216
29-13		銅銭(寛永通寶)		2217
29-14		銅銭(寛永通寶)		2218
29-15		銅銭(寛永通寶)		2219
29-16		銅銭(寛永通寶)		2220
29-17		銅銭(寛永通寶)		2221
29-18		銅銭(寛永通寶)		2222
29-19		銅銭(寛永通寶)		2223
29-20		銅銭(寛永通寶)		2224
29-21		銅銭(寛永通寶)		2225
29-22		銅銭(寛永通寶)		2226
29-23		銅銭(寛永通寶)		2227
29-24		銅銭(寛永通寶)		2228
29-25		銅銭(寛永通寶)		2229
29-26		銅貨(半銭)		2230
29-27		銅貨(半銭?)		2231
29-28		銅貨(一銭)		2232
		銅貨(一銭)		2233
		銅銭(寛永通寶)		2234
		銅貨(半銭)		2235
		銅銭(雁首銭)		2236
	前室攪乱土	銅銭(寛永通寶)一括		2237
	前室攪乱土	鉄銭一括		2238
	玄室(奥室)攪乱土	鉄銭一括		2239



Ph.1 調査区全景(北から)7次



Ph.2 調査区全景(北西から)3次



Ph.3 1号墳全景(北から)7次



Ph.4 1号墳全景(南から)7次



Ph.5 1号墳石室全景(南から)3次



Ph.6 1号墳石室全景(南から)3次



Ph.7 1号墳石室全景(東から)3次



Ph.8 1号墳羨道、墓室部(南から)3次



Ph.9 1号墳石室全景(北から)3次



Ph.10 1号墳羨道部(北から)3次



Ph.11 1号墳
墓道土層(北から)3次



Ph.12 1号墳
五鈴鏡出土状況 3次



Ph.13 1号墳
調査風景(南から)3次

Ph.14 1号墳
周溝SD003、004
検出時(南から)7次



Ph.15 1号墳
周溝SD003、004
(南から)7次



Ph.16 1号墳
周溝SD003
(南西から)7次





Ph.17 1号墳
周溝SD005、006
(南から)7次



Ph.18 1号墳
周溝SD005(北から)7次



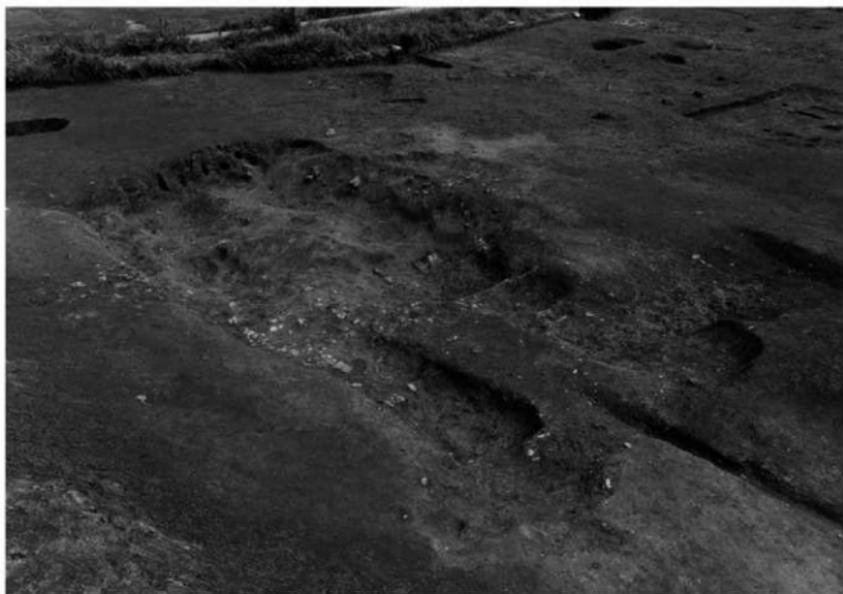
Ph.19 1号墳
周溝SD000(東から)7次



Ph.20 1号墳墓道(南から)7次



Ph.21 1号墳墓道(南東から)7次



Ph.22 1号墳石室堀方(南西から)7次



Ph.23 1号墳石室堀方(北から)7次

Ph.24
SK011(南から)7次



Ph.25
SK012(南から)7次

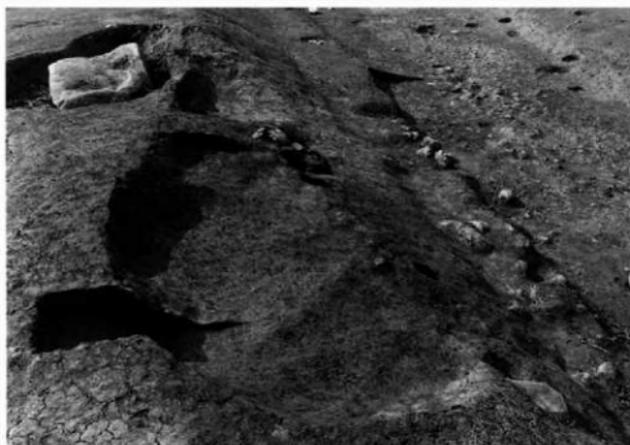


Ph.26
SK010(南から)7次

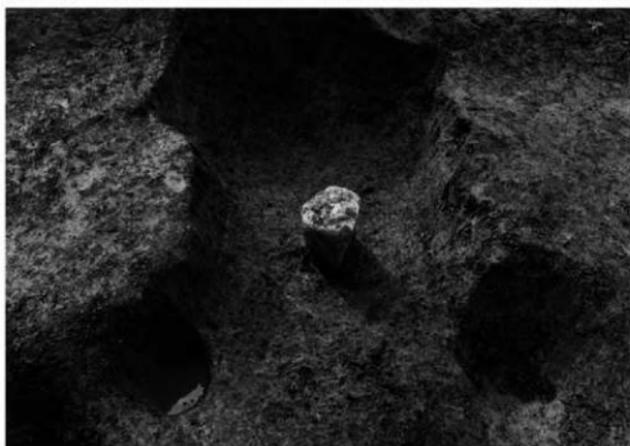




Ph.27
SK011、012(南から)7次



Ph.28
SC025(南から)7次



Ph.29
SC025カマド(東から)7次



Ph.30 SX031(北から)7次



Ph.31 SX031遺物出土状況(東から)7次



Ph.32 2号墳全景(北東から)7次



Ph.33 2号墳全景(北から)7次



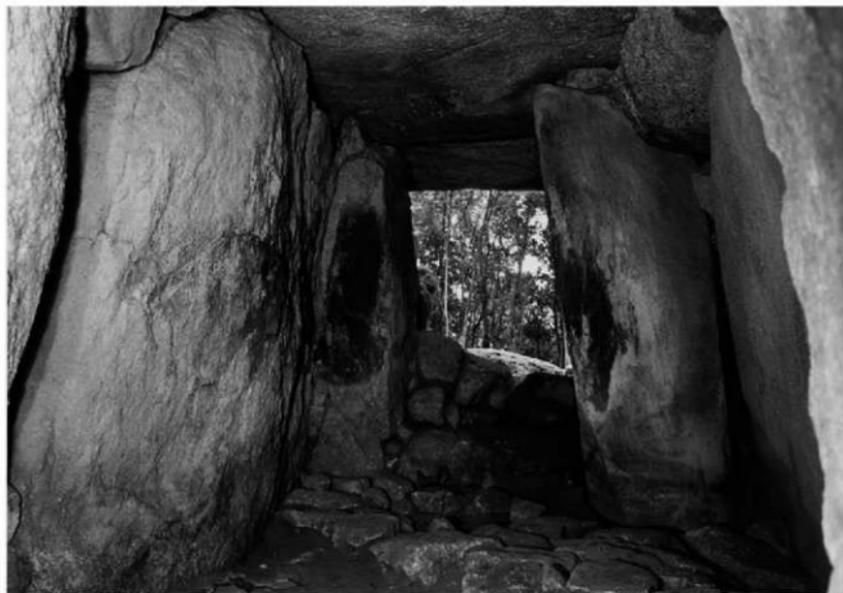
Ph.34 2号墳周溝S D001(南東から)7次



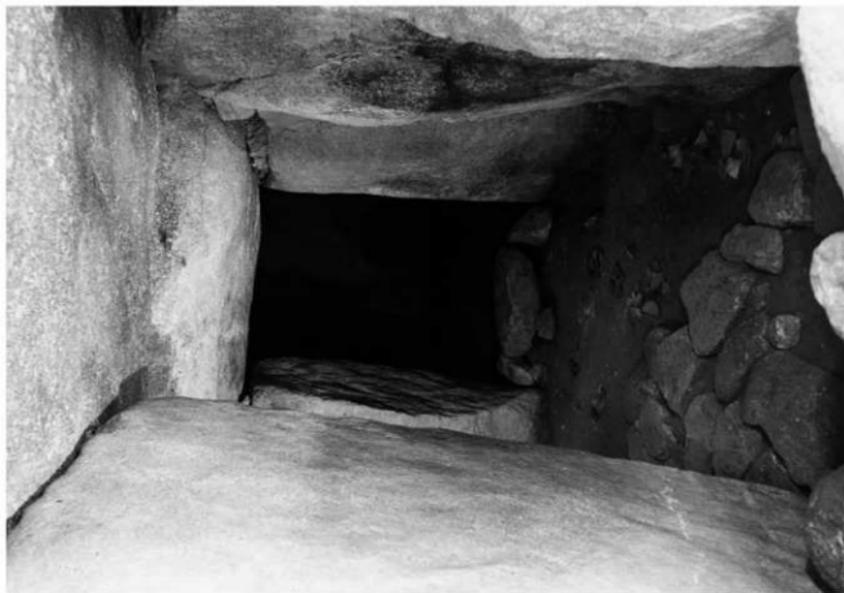
Ph.35 2号墳周溝S D002(東から)7次



Ph.36 2号墳羨道(南から)3次



Ph.38 2号墳玄門からの羨道(北から)3次



Ph.39 2号墳義道からの玄門(南から)3次



Ph.38 2号墳奥壁(南から)3次



Ph.40 2号墳
羨道西壁(東から)3次



Ph.41 2号墳
羨道盗竊(西から)3次



Ph.42 2号墳前室南半部
遺物出土状況(北から)3次

Ph.43 2号墳前室北半部
遺物出土状況(南から)3次



Ph.44 2号墳前室南西部
遺物出土状況(北西から)
3次

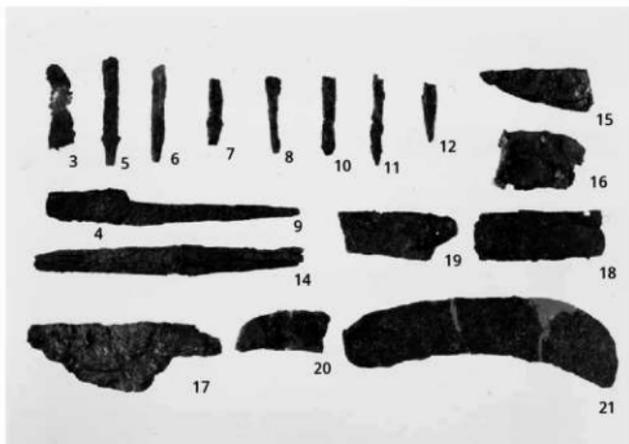


Ph.45 2号墳前室
(遺物出土状況から)3次

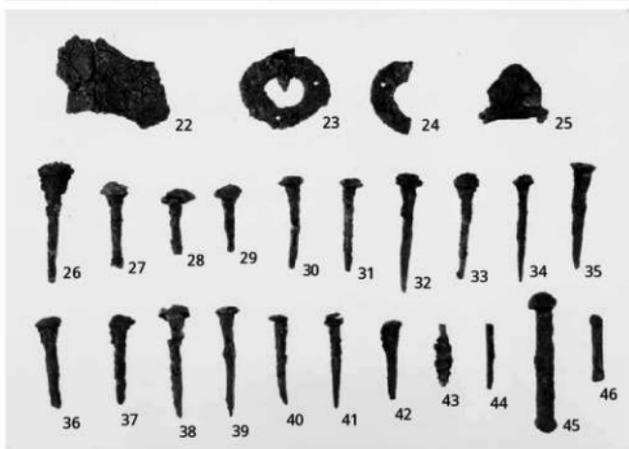




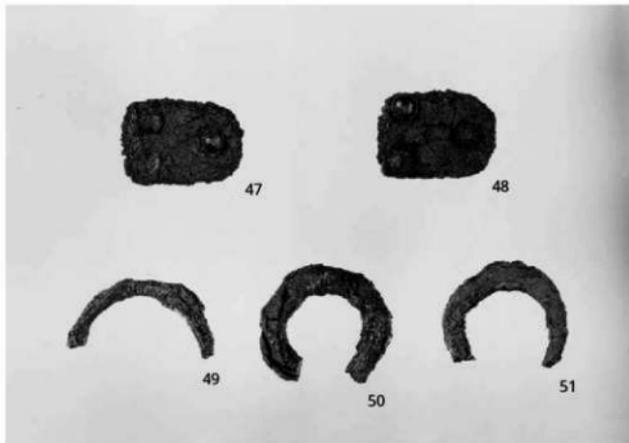
Ph.46 出土土器3次



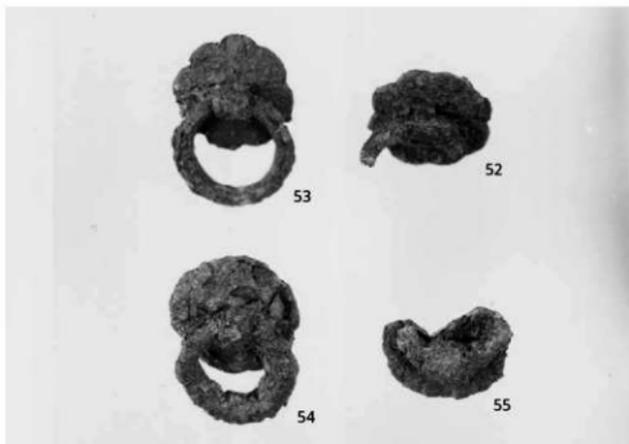
Ph.47 1号墳出土鉄器1



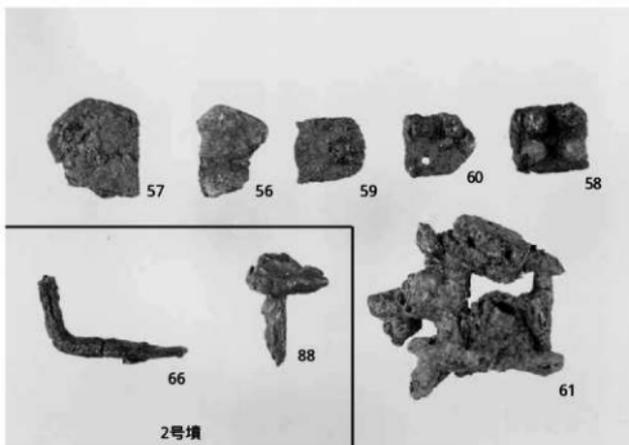
Ph.48 1号墳出土鉄器2



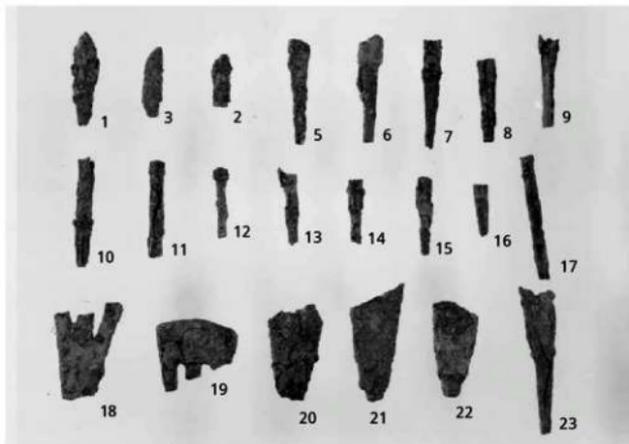
Ph.49 1号墳出土鉄器3



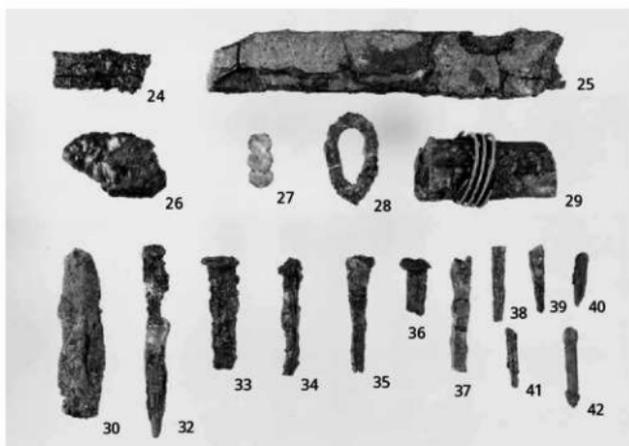
Ph.50 1号墳出土鉄器4



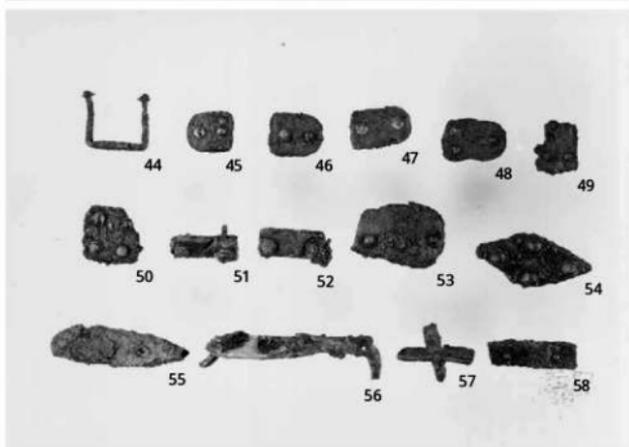
Ph.51 1号墳出土鉄器5



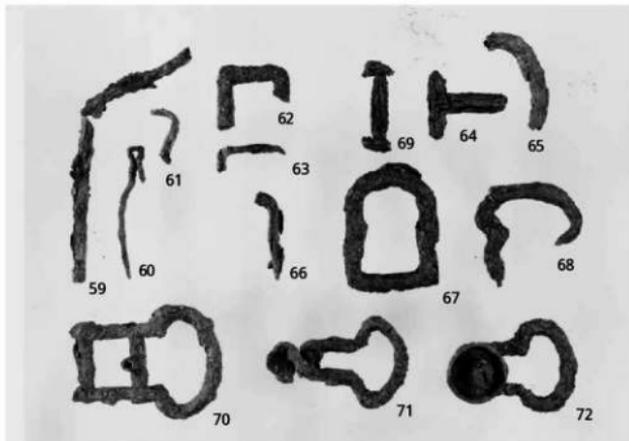
Ph.52 2号墳出土鉄器1



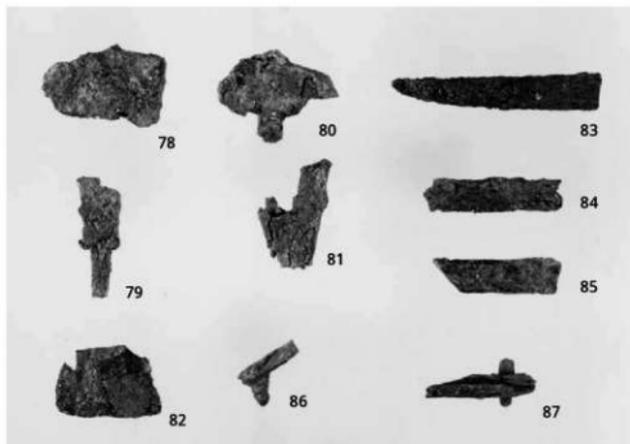
Ph.53 2号墳出土鉄器2



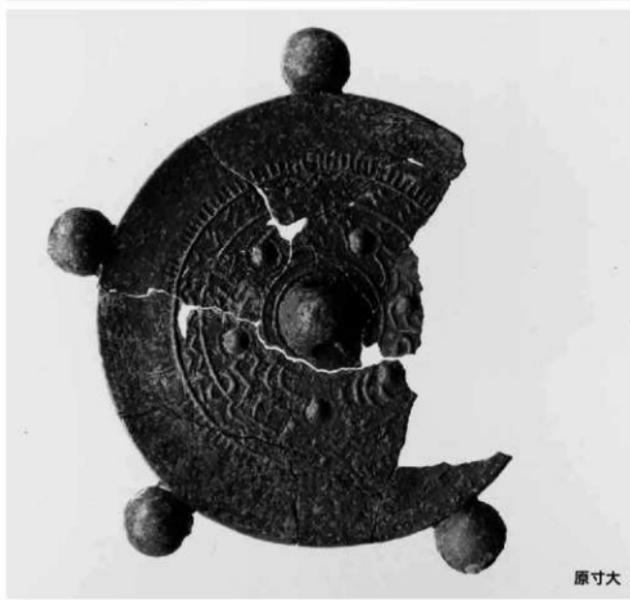
Ph.54 2号墳出土鉄器3



Ph.55 2号墳出土鉄器4



Ph.56 2号墳出土鉄器5



原寸大

Ph.57 1号墳出土五鈴鏡



Ph.58 1号墳出土五鈴鏡

報告書抄録

ふりがな	めおとづかこふん
書名	夫婦塚古墳
副書名	金武古墳群H群7次調査報告
巻次	2
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	908
編者名	池田祐司
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなたけこふんぐん Hぐん	みくおけんふるくおかしにしく あおぞかみなたけ1665ほか	福岡市	0453	33° 31' 32"	130° 18' 31"	20000405- 20001028	4031.9g	確認調査
金武古墳群H群	福岡県福岡市西区 大字金武1661他	40132	0453					

所在遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金武古墳群H群	墳墓、集落	古墳時代	古墳2 土壌墓4 住居跡1	須恵器 土師器	

要 約	3次調査で確認していた夫婦塚1、2号墳の範囲確認調査を行った。1号墳の周囲および2号墳の東側で新たに周溝を検出し、順に幅22m、3.5mの方墳であることがわかった。
-----	--

夫婦塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第908集

2007年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667

印刷 慶和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目15番1号
(092)474-4881